月光花

茶葉風味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光花

【Nコード】

N55520

【作者名】

茶葉風味

【あらすじ】

もう一度。

あなたにもう一度逢えるなら、この先どんな苦難な道のりでも我慢できる。

あなたの事だけを想いながら眠った。

月の光に照らされた。

光に包まれた。

そして、桜の花が綺麗に咲いている。

心はここに。

私は今、一歩前に進む。

存在

白煙に満ちたこの世界で、もう一度あなたに逢えるなら・・・。

心は闇色なのに、空はこんなにも青く輝いている。

思えば、あれは私にとって運命の出会いだったのかな・・・。

もう一度。

どれだけの時間を過ごせば、どれだけの時間が流れればもう一度あなたに逢えるのだろうか・・・。

心はこんなにも熱く、張り裂けんばかりに想いを伝えているのに・・・。

あなたも私の元へと進んでくれているのかな？

約束はしていない。

心が彼を求めている。

彼の心が私を呼んでいる気がする。

そんな短くて、切なくて、悲しい夢を見た。

窓の外からは静かな雪の音。

「雨か……。」

私は進めているのだろうか？

帰国

久しぶりの日本。

匂いも音も何も変わっていない。

あの日からもう10年もの時間が流れた。

彼の事は一度も忘れた事はない。

英語も上手くなった。

たくさんの男性とも出会った。

でも、それだけだった。

ブー、ブー。

不意にポケットの携帯電話が震えた。

カチツ。

「お母さん……。」

「もしもし？ひかり？あんたちゃんとお見合い行きなさいよ！」

「大丈夫だよ。私だってもう29なんだよ？もう子供じゃないんだから……。」

「わかった。寒いんだから、風邪ひかないようにね。」

母は、電話を切る前に小さく笑っていた。

「お母さん。ごめんね……。」

小さくそう私は呟くと、目的の場所ではない方向の電車に乗り込んだ。
だ。

「ひばりヶ丘。ひばりヶ丘。……。」

駅員の声で、初めて来る場所によって来た事に気付いた。

「何処だろ？ここ……。」

少し不安になりながらも、駅を出た。

初めて来る場所なのに、何処かあの町に似ていた。

幼い頃過ごした町。

石垣島の事だ。

「なんだか、悲しいな……。」

公園に佇む彼

駅は何処か寂しく感じた。

たぶん、あの時は彼がそばに居た。

でも、今は私一人だ。

答えは解っている筈なのに、どうしてだろう？

心はそれを否定していた。

そんな事を考えていると、気付けば辺りには民家が広がっていた。

確か、ひばりヶ丘に居た筈だ。

電信柱の縦看板には、東久留米の文字。

知らない土地を冒険してみるのも悪くない。

そう思い、更に足を進めた。

川の音が聞こえる。

川が近くに流れているのだろうか？

どうでもいいか。

静かに流れる川の音が私の硬くなった心を暖めてくれるようだった。

しばらくすると、公園と思われる場所にやって来た。

そこは、数段の階段。

円形の踊り場。

中央には、何の木かはわからないが一人寂しく佇む木があった。

中央の木を囲むようにある低い外壁。

「君も一人なの？寂しいね……。私と一緒にだ。」

もしも、木が話せたなら。

私は彼へのこの想いを全部あなたに聞いて貰って、少しでもこの心の蟠り^{わたかま}を叫んでいたのに……。

「クスッ。」

我ながらさすがにそれは馬鹿みたいだなあと思いつながらも、昔話を彼に向けて語っていた。

どのくらいの間、言葉に花を咲かせていたのだろうか？

辺りは薄暗く、段々空気は冷たくなっていた。

11月ともなれば、さすがに夜は寒く、いつまでも座ってはいられなかった。

「また来るね。バイバイ。」

彼に向けて言った言葉は、冬の気配を纏った風に消されてしまい、悲しくなった。

プー、プー。

カチッ。

母からの電話だった。

私は気付かないふりをして、携帯を鞆にしまいこんだ。

「バイバイ……。」

もう一度。

もう一度、彼に囁いた。

今度は、またおいでと言っているような気がした。

空を見上げると薄っすらと月の気配がした。

日常の中の憂鬱

ここは、遙か遠くの世界。

雪は赤いし、風はなんだか虚しさを含んでいる世界。

僕等は新世界にやって来たのだ。

彼は言う。

「ここから、始まるんだ。」

「ふう。」

なんだか、苛々する。

何故だろう。

仕事も上手くいっている。

今の生活にも満足している。

そうか。

心がここには無いんだ。

描き出す文字にも、携帯の履歴にも、吸い込む空気にも。

悲しさだけが詰まっている。

その結果がこの苛立ちなのだろう。

苛立ちの正体がわかった気がした。

でも、それが本当に当たっているのかはわからない。

こんなにも、考えているのにわからない。

「牧野君。お疲れ様。」

「お疲れ様です。今日は早いですね。」

彼女は2年前僕に告白をし、付き合った。

彼女の熱烈なアタックに負け、なんとなく付き合ってしまった。

職場では、敬語を使うようにしていた。

「牧野君……？今日、あの、ご飯食べに行かない？」

彼女の名前は、なかはら仲原 ゆき雪。

「ああ。いいよ。どこに行く？」

短く答える僕に、彼女は嬉しそうにしていた。

「今日は、パスタかなあ。いや、でもあそこの店ケーキが微妙だっ

たしなあ。」

自分の仕事に戻りつつそんな事を彼女は呟いていた。

彼女の事は好きだ。

恋人としてなのかは、よく・・・。

わからない・・・。

彼女の幸せ

相変わらず人で溢れ返っている駅の近く。

目的地は、2週間程前に彼女と一緒に行ったパスタ屋さんだ。

僕は、あまりパスタが好きじゃない。

理由は、もう忘れた・・・。

「今日は、どうしよっかなあ？」

彼女の笑顔はなんだか嫌いだ。

何処か無理をしているような、悲しさを押し殺したような笑顔だからだ。

「僕は、ミートで。雪は？」

彼女はいつも真剣にメニューを決める。

「うーん。牧野君と一緒にしようかな・・・？」

最終的には僕と同じものになるのだが。

「ちょっと、ケーキ食べ過ぎたかも……。」

苦しそうに言う彼女に苦笑いしか出て来なかった。

「牧野君……?」

不意に彼女は立ち止まり顔を俯かせていた。

「どうしたの?」

彼女の身体がビクツとなった事がわかった。

「今日……。家に行ってもいい……?」

彼女は泣きそうな顔をしていた。

「.....」

何も言えなかった。

「う、ごめんね！いきなりじゃ、ビックリするよね！」

僕は付き合い始めてもう、2年という時間が過ぎているのに.....

お互いの溝のような物はどんどん深くなっていく。

「ごめん。明日、ちょっと用事があるから.....」

彼女を自分の部屋に入れた事はまだ2回しかなかった。

彼女との思い出の品も僕の部屋には何も無かった。

「じゃ、また明後日ね。」

彼女に短く言うと僕は振り返る事もせず、そのまま駅へと向かった。

僕と彼女は、恋人同士がやるような甘い言葉を伝え合ったり、抱きしめてキスなんて事は今まで一度もやらなかった。

たぶん、彼女はそういう事をやりたいのかもしれない。

僕は……。

無理だ。

その日、彼女への想いがもう何も無い事に気付いた僕は、彼女だけの事を考えながら眠った。

次の出逢いで彼女が幸せになれるように必死にお願いをしていた事に、無意識の内に祈っていた事に気付き、罪悪感に包まれ僕と彼女の生活を終わらせようと決めた。

伝わらない想い

昨日、母に怒られた。

約束していたはずのお見合いから逃げたからだ。

でも、私は彼への想いを他の誰かに向ける事がとても嫌だった。

相手を、彼じゃない人を彼に置き換えて付き合っていく事なんて相手にも悪いし、私の彼への想いが無くなってしまいそうで怖かった。

「ひかり。母さんだっていつまでも生きている訳じゃないんだから。安心したいのよ。」

母の口癖はいつだって私の心を突き刺す。

「仕方ないじゃない。好きでも無い相手と、ましてや知らない人とお見合いなんて無理よ。」

母とこの話をする時はいつも罪悪感でいっぱいになる。

「そう。でも、父さんも母さんもあなたに早く幸せになって欲しいのよ。ごめんね。」

「わかってるわ。いろいろ考えたい事があるのよ。今はそんな気にならないわ。」

最近、私は公園の彼所へ行く事が多くなった。

「ねえ。私はどうしたらいいの？」

彼は喋らないってわかってる。

「最近、夢であの頃の事ばかり見るのよ。……って、君に言っても仕方ないか。」

ガサツ。

彼の返事は風に揺られた時の葉の擦れる音だと私は思っていた。

「今日はちょっと早いけど、帰るね。バイバイ。」

彼の事は何も言えないところが好きだ。

何も言わないから、悲しい。

そんなところが嫌いだ。

ザー、ザー。

「バイバイ……か。」

入れ違いに男の人がやってきたが、帰る私には関係の無い事だった。

「誰かに似ている気がするけど……。気のせいか……。」

遠くに見える彼は、たぶんあの男性の話を聞いているのだろう。

さっきまで私が座っていた外壁に、男性は座っているのが見えた。

なんだか、少し吹っ切れた気がした。

「今度、お見合い顔だけでも出そうかな……?」

やっぱり、私の呟きは風にかき消され、何事も無かったような静け

さだけが辺りを包み込んでいた。

その日、私は夢を見た。

飛行機の中から外を見ていて、早く地上に降りたい、彼に逢いたい
と思っていた時の夢。

彼に別れを告げに行った時の夢だ。

飛行機を降りた時、彼は何処にもいなかった。

彼はもう私の事を待っていてはくれない。

いつまでも一緒にはいられない。

永遠とも思える時間の中で私達は、一瞬しか同じ時間を共有して
いなかったのだと気付いた。

彼を望む事はたぶん・・・。

もう、無理なのだわかった。

朝、起きた私は何故泣いているのか、何が悲しいのかわからなかった。

でも、何故か前に進めた気がした。

冬の風が段々暖かくなってきた3月の朝の事だった。

本音と

高級そうなレストラン。

ここは確か、5階だったはずだ。

「藤原さん。前は来てくれなかったから悲しかったよ。」

「すみません。急に用事が出来てしまって……。」

疲れる。

彼はとてもカッコいい。

「でも、今日来てくれた。まあ、いいかな？」

「ありがとうございます。」

性格もたぶん良い方なのだろう。

「えっと。なに言えはいいかわからないですね。こんな時。」

「そうですね……。」

でも、何処か違う。

彼は初対面で好印象だった。

なんだか、泣きそうだ。

「あ、趣味とか聞いてもいいですか？」

「はい。趣味って言っても、散歩くらいしかありません。」

私の思い込みだろうか？

何処かで彼の事を拒絶している。

「中村さんは趣味なんですか？」

「達哉たつやでいいですよ。」

彼の笑顔は誰が見ても綺麗なんだろうな。

「趣味でしたね。うーん。いまは、映画鑑賞とか絵を描く事かな。」

「ひかりさん。今日はありがとう。楽しかった。」

「いえ、楽しんで貰えたなら良かったです。」

愛想笑いで誤魔化した。

近くにはホテル街。

「また連絡しますね。中村さん。」

「はい！気をつけて。」

彼との初めてのお見合いは何事もなく終わった。

ガチャツ。

「ひかり!どうだった!」

帰ると玄関で待ち構えていたのか母が大きな声で聞いてきた。

「カッコいい人だったよ。」

母の嬉しそうな顔を見ると本音を言えなくなってしまった。

「ひかり。疲れたなら風呂に入って早く寝なさい。」

父は何も聞かず私を気遣ってくれた。

彼はとてもカッコいい。

でも、やっぱりあの人は違う。

そんな事はわかっていた。

でも、わかっていなかった。

本当に好きな彼はたぶん今頃、新しく恋人を作って幸せに過ごしているだろう。

きつと、必死に願っても叶わない恋ならば……。

止めよう。

今日、少しだけ前に進めた。

きつと私はもつと進んで行ける。

ベットに入り、眠りについた私の目元には涙が溜まっていた事に、私は気付かなかった。

ただ彼に逢いたいと無意識に願っていた。

メール

朝起きたらいつもより少し暗かった。

少し雨の匂いがした。

昼前になると、何事も無かったように空は青くなっていた。

ピュピュ！

ベランダでぼんやりとしていたら、携帯のメール着信音がした。

カチャッ。

今、大丈夫ですか？

雪からのメールだった。

「ふうー。」

ピッピッピッ。

カチャッ。

彼女からのメールで何が言いたいのかは、すぐわかった。

ピピピ！

牧野君。

私達は付き合い始めてもう、2年の月日が経ちました。

あなたは私と一緒に居て楽しいですか？

それとも苦しいですか？

私はあなたと一緒に居れることを幸せに感じます。

でも、あなたとメールや電話を何回も何十回も何百回もやり取りしても、何処かで拒絶されてるような気がします。

あなたとの距離は連絡を取る度に少しずつ離れていつているように感じます。

あなたはどのような事を望んで私と付き合い合ってくれたのでしょうか？

やっぱり聞かないでおきます。

最初から苦しめていたなんてことは言われたくないの・・・。

たぶん私は、この先もあなたの事がどうしようもない程大好きで居続けると思います。

でも、それは私の理由です。

たぶん、あなたはこの前の食事の時、私と別れることを決意しましたね？

大丈夫。

あなたの事は何も恨んでいません。

むしろ、幸せな時間をたくさんありがとうございます。

私と別れてください。

次にあなたと出遭う方が運命の人でありますように……。

幸せになってくださいね。

カチャッ。

彼女の事をずっと苦しめていたのは僕だ。

ずっと前から、彼女の事を好きじゃないって気付いていた。

僕はたぶん、ひとりきりになってしまふ事が怖かったんだと思う。

彼女にはとても酷い事をしてしまった。

今更、後悔をしてしまった。

彼女の為にも僕は幸せにならなければ……。

その日、僕は少しだけ前に進めたと思う。

雪を犠牲にでしか進むことは出来なかった。

彼女からの別れのメールは僕が送ろうとしていた内容よりも温かかった。

心の中で彼女へありがとうを、感謝の気持ちを、彼女が幸せになってくれることを願いながら、気付けば眠っていた。

彼女と逢うことはもう無いだろう。

会社を彼女に内緒で今日辞めてしまったからだ。

「……ありがとう……。」

冷たくなった部屋の中で

カチャ。

「送ってしまった・・・」

今更、後悔してしまっても遅いのに。

彼がずっと前から、私の事を見ていてくれてないことには気付いていた。

彼と一緒に居られるだけで幸せだった。

でも、やっぱりそんな自分が悲しくて、なんだか虚しかった。

彼を励ますような内容を送ってしまったのは、私の最後の我が儘なのだろう。

きっと私は彼に覚えていて欲しかった。

これから先も、私のような人が同じ時間を生きていたという事を。

そう。

覚えていて欲しかっただけだ。

この先、何年、何十年生きていけるのかわからない時間の中で、あなたという掛け替えの無い出会いがあったという事を自分自身に刻み込みたかっただけ。

理由はそれだけ。

あれ、でも私馬鹿みたい・・・。

彼という支えが無くなった一人きりの部屋がこんなにも寂しくて、冷たいものだなんて解ってたはずなのに・・・。

涙が止まらないや・・・。

「高志くん・・・。寂しいよ・・・。」

その日、私は仕事を休んだ。

彼の微かな匂いが残るあの職場。

きっと彼はもう居ないだろうあの場所に。

彼は気付いてなかったかもしれないけど、辞めること知ってたよ。。。

一人だと彼の事ばかり思い出してしまう。

でも、今日だけなんだ。

明日からは、彼とはもう逢えない。

彼の事を考えていいのは今日だけだ。

明日からは、それぞれ違う道に進むんだ。

でも……。

「高志君って名前で呼びたかったな……。」

それでも……。

もしも、神様が願うなら・・・

きっと、明日は晴れるだろう。

君が願った日々はきっと僕等を救ってくれる。

嫌いだったこの雨もなんだか今日は、美しく見える。

「君の物語は僕が受け継ぐよ。」

君はもういないけれど、君の想いは僕の中で輝いている。

きっと、この先何十年ずっと輝き続けるだろう。

君が願ったこの星で・・・。

仕事を辞めてから、もう一ヶ月の時間が流れた。

いまだに家でこっそりと書き続けている小説は、誰の為に書いているのだろうか……。

わからない……。

寝る前にふと思った。

この世に神様がいるのなら、僕らは神様にお願いをすればいいのだから……。

もし、もしも神様が何か願い事をしたならば。

それは、誰に願うのだろうか？

神様に願い事があるのならば。

僕等は誰にお願いをすればいいのだろうか……？

きっと神様に逢ってみないとわからない。

でも、僕は神様が願い事をするならばきっと僕等人間にお願いするのだと思う。

神様はたぶん僕等人間に一番近い存在なんだと思うから……。

こんな事を考えるなんて我ながら馬鹿だなあと思った。

昨日見たテレビの影響だろう。

「ふう……。」

手に持って忘れていた煙草を、吸い込んでみた。

「おいしくないな……。」

変な事ばかり考えていたからだろう……。

最近、彼女の寂しそうな顔ばかり思い出す。

せつかく雪のおかげで前に進めた気がしたのに……。

「なにやってんだよ……。俺……。」

彼女は元気なのだろうか？

病気とかになっ
てなければい
けど・・・。

「ひかり
・・・。」

一歩

コンコン。

ドアのノックする音で目覚めた。

昨日はいつの間にか寝てしまっていた。

コンコン。

再度ノックの音が聞こえた。

「あ、入っていいよ！」

扉が開き、珍しく父が部屋に入ってきた。

「お父さん、おはよう。」

「おはよう。」

いつもと様子の違う父に少し戸惑った。

「どうしたの？お父さん？」

「ひかり。あまり無理をするな。」

父の悲しそうな横顔に泣きそうになった。

「お父さん。大丈夫だよ。無理してないよ。」

「そうか……。お前は好きなように生きる。好きな相手を追い続けるのもいいし、結婚なんてしなくてもいいし、まあ、言い方は悪いが不倫だって言いとさえ俺は思っている。お前の人生だ自分で決めてくれ。母さんを安心させたいのはわかるが無理だけはするな。自分の好きなように生きる。」

普段、あまり会話をしない父がこんなにも長く話しをしたことにとっても驚いた。

同時に、私の事をちゃんと見ていてくれていた事に涙が溢れそうになった。

「すまん。本当は起こしに来ただけだったが、お前の泣いた顔を見るとついな……。」

父が最初何を言っているのかわからなかった。

「へ……?」

父は不思議そうな顔をしていた。

「まあ、いい。早く下に来なさい。母さんがご飯の支度を済ませて待ってる。」

「うん。すぐ行く。」

きっと父は最初からしっていたのだろう。

私が無理をして1回逃げ出したお見合い相手に会ったという事実について。

父から見れば、仲の良かった高志君の事……。

「ありがとう。お父さん……。」

私は決めた。

もう一度、高志君に逢うことを。

どんなに時間がかかっても諦めないことを。

きっと彼も私の事を探してしてくれる。

何故だろう？

こんなにもこんなにも時間が流れたのに、彼が待っていてくれる気がするのは……。

でも、父のおかげでわかった。

どんなに時間が流れても高志君への想いが変わらないこと、高志君をこんなにも大好きだという事。

もう一度彼に逢いたい。

ガチャ。

「お母さん！おはよう！」

「朝からそんな大声出さなくても聞こえているから。まったく……」

父の微笑む横顔に嬉しくなった。

父も母も大好きだ。

きつとこの先ずっとそれは変わらないだろう。

彼への想いもずっと・・・。

ここからが本当の始まりだ。

漸く、進めた一歩。

「今、行くよ。高志君……。」

「何？気持ち悪い。ニヤニヤして……。」

「なんでもない！お母さん、ご飯！」

「いただきます！」

こんなにも青い空の下で。

カチャカチャ・・・

カチャン！

「ふう・・・。」

窓の外から気持ちいい風が吹いてきている。

いろんな想いからか、脅迫的とも言える何かを感じひたすら働いて

今では、すっかり何もかも消え失せてしまった。

仕事を辞めた理由は、雪の事もあったが何よりあのほとんど脅迫的だと言えるものが気付けば完全に消え失せてしまっていたからだ。

消え失せた事に気付いた日、ただひたすらに働いている自分がただひたすら痛かった。

昼間は、パソコンに向かい夜になると暗い部屋の中で一人缶ビールを片手に面白くも無いテレビを見ていた。

今日は、天気もいいし何より風が気持ちいい。

桜の花が綺麗に舞い落ちている光景をたまにはゆっくり見てみたいものだ。

今日は少し肌寒い。

薄く何かを羽織って行こう。

「ひばりヶ丘。ひばりヶ丘。この電車は・・・」

電車に乗ってしばらくすると初めて聞く駅についた。

なんとなく、その駅で降りようと思った。

駅を出ると有名なデパートや西武線特有のスーパーがあったりで想像以上に賑わっていた。

駅周辺は何故か石垣島に少し似ていると思った。

全然雰囲気も違うのに何故かそう思った。

まあ、いいや。

桜を見に行こう。

駅から少し歩くと民家ばかりある道に出た。

初めての土地なのに懐かしかった。

「ふう……。」

煙草に火を点ける。

吐き出した煙は、眩しいくらいの青空に飲み込まれていった。

彼は佇む

しばらく歩くと、道に迷った。

来た道を覚えておけば良かったと今更後悔した。

「たまにはそれもいいか……。」

最近、独り言が増えた気がする。

やっぱり、僕は独りだと寂しくなる性格みたいだ。

だからといって、自分から進んで周りの人と仲良くなるうとは思わない。

僕は、少しも大人になれていない気がする。

それがわかったから、どうした？って感じたが……。

やめよう……。

しばらく歩いていると公園らしい場所に出た。

僕が好きな雰囲気のパークだ。

寂しそうに佇む彼は誰かが来るのをずっと待っていたのかもしれな

い。

僕の勝手な予想だが。

数段の階段。

円形の踊り場。

中央には、何の木かはわからないが一人寂しく佇む木があった。

その中央の木を囲むようにある低い外壁。

しばらく、彼を眺めていたが遠くから誰かが歩いてこっちに来る姿が目映った。

今は、あまり人と関わりたくない。

独りは寂しいくせに矛盾している。

歩いてくる女性とは逆の方向へと僕は歩き出した。

「桜を見に来ただけだな……。まあ、いいや。」

何か引つかかる。

ふとそんな事が頭に浮かんだ。

少し考えるため立ち止まり、振り返ってその女性の顔を見ようと思っただが失礼だと思い僕は歩き出した。

明日もここに来よう。

帰りは道をちゃんと覚えておこう。

もう一度少しだけ立ち止まり、再び歩き出した。

今日は先客が居たようだ。

まあ、いつか。

彼と会うのは久しぶりだ。

「よー！元気にしてた？」

いい年した女が木に話しかけているなんて、周りから見たら馬鹿に見えるだろうな……。

そういえば、さっきの男の人どっかで見たことがあるような気がする。

まあ、いいか。

その後、私は日が暮れるまで彼の周りの外壁に腰掛、近況をかれに報告した。

演技

その事について関わったのは良かった事なのだろうか？

それとも、悪かったのだろうか？

でも、私は放つてはおけなかった。

公園の彼との帰り道、高校生くらいの女の子が道路の真ん中で佇んでいた。

周りには私と彼女しかない。

誰かを待っているのだろうか？

それにしても何故道路の真ん中で佇んでいるのだろうか

後ろの方から、前から車の迫る音。

彼女は少しも動く気配は無かった。

不思議に思った私は少し様子を見ることにした。

段々と迫り来る車。

運転手は彼女の存在に気がついているのだろうか？

スピードの落ちない車、動かない彼女。

我慢できなくなった私は勢い良く走りだし、彼女を歩道まで手を引つ張り走った。

「はあ、はあ、はあ……。ねえ、はあ、大丈夫……。はあ。」

何も言わない彼女を見て、無事を確認した。

2台の車はこちらを睨みつけ、今はもう消えてしまった。

「死にたかったのに。」

不意に彼女っはそんな事を言い出した。

「今日は月が綺麗だったから、天国まで一番近づけると思ってたのになあ……。」

淡々と語りだす彼女の顔は涙で濡れていた。

「そう。死にたいのなら誰にも知られない所で死になさい。」

漸く息の整った私はそう彼女に伝えた。

「でも、苦しいの！死にたくない！なんで、死なせてくれないの！」
取り乱す彼女。

「なら、こんな場所を選ぶべきでは無かったわね。」

キツイ言い方をする私を彼女は睨みつけていた。

助けた側の人が必要な事を言い出すなんて思わなかっただろう。

「なら！なんで助けたの！」

「理由は無いわ。今日は月が綺麗だったし、こんな日に目の前で人が死ぬなんて嫌じゃない。」

この演技はもう疲れたけど冷たく接しないと彼女の為にならない気がした。

「そんな理由で……！」

「そんな理由？あなたは目の前で死にそんな人を助けるのに理由が必要？」

「要らない……。迷わず助けると思う……。」

彼女はどうかやら本当は優しい性格みたいだ。

あくまで予想だが。

「そう。自分は死のうとしたのにね。でも、私は助けないわ。理由が無い限りね。」

私の発言に彼女は驚いた顔をしている。

「死にたければ勝手に死になさい。今夜の場合、私はゆっくり月を見ながら帰りました。そんな時に目の前で自殺なんて月が汚れて見えるじゃない。」

そう言っただけで私は歩き出した。

これ以上は演技は続けられないからだ。

「待って！」

彼女のその言葉に立ち止まり振り返った。

「あなたの事は嫌いだ。だけど助けてくれた事には感謝します。本当は助けてくれた時あなたが女神のように感じたけど、やっぱり違ってみたみたい……。」

「そう。それだけ？ 私は早く帰ってお風呂に入りたいのだけれど。」

「それと、私は神埼 岬かみさきって言います。一応助けてくれたのですからあなたのお名前だけでも聞いてもいいですか？」

「嫌よ。面倒くさい。」

「そう……ですか。今夜はありがとうございました。」

彼女のその言葉を合図に私は再び歩き出した。

「ありがとうございます。」

死にたい理由を聞かずにいてくれたあの女性はたぶん本当は優しい人のはずだ。

私の事を思って冷たく接してくれたのだろう。

死ぬ為の理由はもう考えたくない。

今からは、生きる為の理由を探し出そう。

あの女性のように綺麗になりたいから。

あ、そっか。

あの女性のようになりたいても十分生きる理由になるじゃん。

この日から、あの女性は私の中で憧れになった。

「強く生きて見せます……。」

父の想い

「ただいま。」

誰もいない家に入り、昔からの口癖を言ってみた。

冷め切った部屋に虚しく響き渡る私の声。

バン。

冷蔵庫の扉を開けるが中にはポツンと昨日買った卵だけが冷やされていた。

ボタン。

「お米買わないと……。面倒くさい。寝よ……。」

自分の部屋に入り、見渡すが相変わらずベットと勉強机があるだけの寂しい部屋。

本当に女の子の部屋なんだろうか？と思わず聞きたくなるような寂

しい部屋。

ベットは小学校の頃、まだ両親が仲良しの時に買って貰ったものだ。

あの時、まだ小さい私にこんなにも大きいベットを買ったのはきっと、両親と一緒に寝てくれる為だと思っていた私がかんたか輝いて見える。

父と最後に会ったのはもう一週間前。

母に会ったのはもう二ヶ月も前の事だ。

母は、今もきつと何処かで私の知らない男性と一緒にいるのだろう。

父は、正直よくわからない。

今日、見たのはただ仲の良い女性と一緒にいただけなのかもしれない。

母は、浮気癖が酷かったらしく気が付けば、父と結婚しているにも関わらず二股をしていたらしい。

私が、ベットを買って貰った時には既に何人かの男性と不倫していたのだろう……。

しかし、父は最後まで母を想い続けているのだと今日まで思っていた。

結果的には父にも裏切られてしまったのだが……。

父にも、母にも裏切られた私は今日死ぬ事を選択した。

「あの女性^{ひと}、演技が下手だったな……。」

今はいないあの人のおかげで私は生き残る事が出来た。

それが良かったのか、悪かったのかはわからない。

でも、一つだけ解った事がある。

私はまだ、生きていていいという事。

あの人に助けられた命、一生懸命生きて見せよう。

何故かそう思わせてくれた。

「明日も、学校か。」

携帯電話を充電している事を確認し、私は眠りについた。

ガチャ。

「岬……ごめん。父さんはやっぱり岬を一人にする事は出来そうにない……。」

深い眠りについていた私が、父のとても優しい顔を見ることは出来なかった。

「明日から、またお父さんって呼んで貰えるように頑張るからな。おやすみ。」

翌朝、誰もいないはずのリビングには私と父の二人の姿があった。

君が居た場所

ああ。

何年ぶりだろう。

君とこうしてまた出会えたのは。

誰にも言わない誰にも言えない君の居た場所。

やっと気付いた。

心の隅に隠れていた。

でも、今は目の前に居る。

「ひかり。誕生日おめでとう。」

そう言うと彼女は、その可愛らしい瞳から一筋の涙を流した。

「高志君……。」

擦れた声で僕の名前を呼ぶ彼女。

「大丈夫。ゆっくりでいいんだよ。」

「……。」

「高志君。あのね……。」

しばらくすると、どつやら彼女は落ち着いたのが、ゆっくりとその小さな唇を動かした。

「どつしたの？」

「久しぶり！」

そう言うと、彼女は今まで僕が探し求めていたその笑顔を僕に見せてくれた。

と、同時に僕は気付いた。

たぶん彼女も、同じ考えなのだろう。

しかし今日、久しぶりに再会して10分程の時間しか流れていなかった。

「覚悟は出来た？」

「大丈夫だよ。高志君とたぶん同じ考えだから。」

やっぱり、僕達は何処か良く似ている。

「幸せになってね。」

僕が言葉を発せようとした時、彼女に先に言われてしまった。

ずっと探し求めてきた彼女が目の前に居るのに、僕らはこの再会で新たな決心がついた。

きっと、お互い大人になって行くにつれ心も成長したのだろう。

僕が大好きだったのは彼女ではない。

心の中に居る昔の彼女に僕はずっと恋していた。

彼女もきつとそうだろう。

僕等の存在は今では何処かよく似ている親友になったのだろう。

君が精一杯頑張ってきた事を僕は知らない。

彼女は僕が一人の女性を犠牲にして成長できた事を知らない。

こんな些細な事が、彼女と僕を大きく成長させてくれた。

今までの恋は成長して友情になっていくのだろう。

「ひかり。大好きだったよ。」

「高志君。私も大好きだったよ。」

きつとここから、僕達はまた少し成長できるのだろう。

「桜。綺麗だ。大きくなったたひかりも綺麗になったね。」

「變じてるよ。」

小さな声で呟いた言葉。

彼女には聞こえてはいない

僕は、まだ彼女の事が好きだ。

たぶんこれからもずっと。

「高志君！携帯教えて！」

誰も気にしない様な事

今日はとても気分がいい。

朝は気持ち良く起きる事が出来た。

そうだ。

桜が綺麗だと言われている都立小峰公園に行こう。

思い立ったが吉日。

そんな言葉が頭に浮かんだ。

すぐに部屋に戻り着替えた。

電車に揺られて、約2時間。

漸く目的地の武蔵五日市駅に着いた。

駅から歩いて約20分。

やっと、都立小峰公園に着いた。

4月になったというのに桜は満開でとても綺麗だった。

歩き疲れた私は近くにあるベンチに腰掛けた。

「気持ち良い。来て良かった。」

「隣、座つてもいいですか？」

声を掛けられ漸く、自分が桜を見上げながらぼんやりしていた事に気付いた。

「あ。大丈夫ですよ。」

知らない人の筈なのに何処か懐かしい感じがした。

「あ、ありがとうございます。」

彼は一瞬、驚いた顔をしていた。

何故だろうか？

彼を知っている。

心が覚えている。

彼に気付かれないように彼の横顔を見た。

この感覚は昔感じたあの感覚に似ている。

そうだ。

彼はきつと……。

「良かったらどうぞ。」

来る時に買ったコーヒーを彼に差し出す。

「え……？ありがとうございます。」

彼の微笑みは昔と変わっていなかった。

もう一度、桜を見上げる。

桜の花弁が綺麗に舞っている。

まるで、夢の世界にいるみたい。

気が付くと私は微笑みを浮かべていた。

彼もきつと桜を見上げながら、夢の世界にいるみたいだ。

そう思っている。

私達は何処かよく似ていた。

あれだけ探し求めていた彼を目の前にしても、心はとても穏やかだ。彼に再会できたとしたら、きっと興奮のあまり泣いてしまっただろうと思っていたがそうでもないみたいだ。

「あの・・・?」

「は、はい・・・!」

急に彼が声を掛けてきたものだから、驚いてしまった。

「今日は何の日でしょうか?」

彼の問い掛けに思わず微笑む。

「誕生日おめでとう。ひかり。」

少し寒さの残る、桜が舞う公園で、起きた小さな出来事。

私達は再び出遭えた。

分かち合えないような他人事。

それでも、私にとっては大事。

嫌いだった春紫苑の花がなんだか綺麗に見えた。

春

まだ、夢の中にいるようだ。

彼と再会することができ、そして大きな一歩を進むことが出来た。

これで、よかったのだろうか？

たぶん、彼に連絡先を聞いたのは私の弱さ。

何処かで吹っ切れていなかったのだろうか……。

別れ際の彼の寂しそうな笑顔が頭から離れない。

「きつと大丈夫……。」

ひかりと別れてから気が付けば、1時間もの時間が過ぎていた。

僕は、ショックだった。

あの頃のまままでいられると思っていたのに、それが大間違いだったという事を未だに受け止めきれない。

僕はずっと、彼女の隣にいたかっただけだ。

きっと、彼女と再会した瞬間にこれほどにも愛おしいとは思えなかった。

僕の身体の中で誰かが隠してしまったような気持ち悪い感覚が、ぐるぐると蠢いている。

たぶん、あれの事も関係あるのかな・・・。

「ふう。少し風が強くなってきたな・・・。さあ、帰ろうか。」

僕達の再会は最高のとは言えないけどそれなりに納得のいく再会だったはずだ。

でも・・・。

〜春紫苑〜

小さい野原の真ん中にある丘の上には小さな一つの生命いのちが生まれま
した。

しかし、この丘は彼以外誰も育つことが出来ませんでした。

彼は誰かに見つけて欲しいと一生懸命成長していきました。

ある日の事です。

そんな彼にも友達が出来ました。

人間の少女です。

彼女は毎日来ては彼の事をじろじろと眺めるのです。

そんな事が数日続きました。

彼女はブリキの如雨露じゅうりゅうを片手に彼の元へやってきました。

「君は私の友達。」

少女はそう言うと、持ってきたブリキの如雨露で彼に水をやりまし
た。

彼は、少女と話がしたかったのだけれど、彼は花で彼女は人間。

彼は少女のおかげでどんどん大きくなっていきました。

そんなある日の事です。

毎日毎日来てくれた少女がもう何日も来なくなりました。

でも、彼は少女の家まで行くことはできません。

彼は花だからです。

少女はそれから一年近く姿を現しませんでした。

しかし彼は、決して諦めませんでした。

彼女との思い出を大切にし、とうとうこの野原で一番大きな花へと成長することが出来ました。

寒かった冬も過ぎ、今は温かい春です。

今まで頑張ってきたのはこの日の為。

さあ、今こそ綺麗な花を咲かそう。

きっと彼女も何処かから見てくれているはずだ。

その日、小さな野原の丘に一輪の花が咲き誇った。

遠くから少女が微笑んでいるような気がした。

心から想えますか

やがて春が過ぎ、蝉の鳴き声が響き渡り少しずつ気温も上がっていった。

そう、夏が来たのだ。

ひかりとは、時々連絡を取っている。

それだけの関係だ。

新しく仕事を始めたそうだ。

コンビニの店員だそうだ。

周りからみたら、それが当たり前なのかもしれない。

でも、彼女にとっては大きな一歩なのだろう。

それに比べ僕はというと、いまだに働けずにいた。

怖いのだ。

これ以上一歩でも進んでしまったら、彼女から離れていってしまいうそで怖かったのだ。

働かざる者喰つべからず。

確かにそうなのかもしれない。

あれだけ貯めていた貯金も底を尽きそうになっていた。

あの日から僕は、少しずつ荒れていった。

毎日、パチンコに行ったり酒を浴びるほど飲んだりして、一人の間を過ごす事が以前にも増して増えていった。

パチンコや酒はいろいろ考える事を忘れさせてくれた。

ただ、パチンコは賭け事だし、勝てばいいのだがやはりただ適当に座って何も考えなくていい時間を増やしたかった僕は、そんな事を気にしてはいなかった。

夏も終わりを迎えようとしていた時、ひかりから連絡があった。

内容は、今度一緒に食事でもしながらお話でもしないかとの事だった。

僕は彼女に会える喜びと、こんなにも荒れてしまった僕を見せる事に恐怖する自分があることに気がついた。

やはり、彼女には失望されたくない。

でも、なかなか一步を踏み出せない僕がいる。

「なんだ……。僕もまだまだ子供じゃないか……。」

カチャ。

ピッピッピッピッ……。

それから一週間の時間が流れた。

今日はひかりとの約束の日だ。

待ち合わせは昼1時。

随分とゆっくりだが、彼女にも予定があるのだろう。

電車に乗って待ち合わせの駅に着いた僕は、待ち合わせより5分遅刻している事に気がついた。

慌てて駅の改札口を出て駅前の交番の近くへ向かった。

周りを見渡しても彼女の姿は見えなかった。

なんだか急に心細くなった。

それから1時間彼女からの連絡は一切無かった。

自分から連絡してもよかったのだが、怖かったのだ。

それから待つこと1時間。

ブー、ブー。

漸く鳴った携帯電話の画面には、ひかりの文字。

何を言われるのだろうか……。

そんな事を思っただけで画面をずっと見ていた。

ふと、画面が暗くなり電話が切れた。

しばらくしてまた電話がかかってきた。

画面にはひかりの文字。

今度こそ、勇気を振り絞って電話に出てみた。

「すぐ行きます！」

僕は、走り出した。

途中転んだりもした、体の何処かには痣も出来ているのだろう。

それでも走った電車に乗って降りてはまた走って。

彼女のもとへと走った。

漸く、走り着いた先は病院。

何もかも忘れ去りたかった……。

夢

今日は、高志君と久しぶりに会える日。

私は、朝から少し浮かれ気味だった。

コンビニのバイトも午前中には終わるので待ち合わせには十分間に合うはずだ。

「じゃあ、お母さん行って来ます！帰り少し遅くなるから！」

母にそんな事を言いながら家を飛び出した。

「お疲れ様でした！先に失礼します！」

いつも通りの挨拶。

お疲れとの仲間からの声。

いつもは考えないことを考えてしまった。

何故だろう？

今日は空が静かな気がする。

横断歩道を渡る。

信号も青だし、周りには車の気配すら無い。

確かに確認したはずなのに。

がじんー…！

鋭い痛みを感じて私は意識を手放した。

「初めまして。藤原ひかりです。」

これは昔の夢だ。

私はいつの間に寝てしまったのだろうか……。

高志君だ。

黒板の文字を乱暴に消してる姿は今でも心強かった。

もう少し見たいのに、なんだかどんどん眠たくなっていくよ。

何でかな・・・。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
。

流れる時間と共に

長い廊下を全力で走る。

途中誰かに注意されていた気がするが、そんな事はどうでもいい。

いまは彼女が心配だ。

受付で彼女の部屋番号を聞き、お礼も言わずまた走る。

僕は何を焦っているのだろう。

彼女はきっと大丈夫。

落ち着かないと。

動かし続けた足をゆっくりと緩めていく。

落ち着こう。

「すう……はあ……」

よじ。

ゆっくりとした歩調で彼女のいる病室に向かう。

「んんん。」

「んんん。」

中から男性の声が聞こえる。

「失礼します。」

やはり中には彼女の父親がいた。

ベットにゆっくりと顔を動かす。

そこには、頭に包帯を巻いた女性の姿。

「ひかり……。」

間違えようのない彼女の姿がそこにはあった。

顔にも擦り傷。

腕にも……。

息をするのが辛そうな呼吸音。

この時僕の顔は泣きそうな顔をしていただろう。

「高志君、久しぶりだね。」

「え？あ、はい。お久しぶりです。」

いきなり声をかけられ驚いてしまった。

「こんな事になってしまい、すまない。」

彼、健人^{たけひと}さんは悪くないのに僕に頭を下げてきた。

「ちょっと！やめてください！健人さんは悪くないじゃないですか
！」

必死になる僕を見て、泣きそうな顔になる。

しばらくの沈黙の後彼は搾り出すように呟いた。

「本当は、朝止めておくべきだったんだ。」

いきなりそんな事を言い出す。

「どつという事ですか？」

「嫌な予感がしたんだ。何か体に中を引っ掻きまわされているような感覚……。」

その後、僕は健人さんの顔があまりにも悲痛な表情だった為何も言えなかった。

「少し外の空気を吸いに行きましょう。」

長い沈黙の後漸く出せた答えがこんな事だった。

その事自体が正しい答えなのかは知らない。

少しでも落ち着いて貰いたかった。

「ひかりはきつと大丈夫……。」

病室から出る時、小さい声で自分に言い聞かせた。

真っ赤な空を見ただろう

屋上にやって来た僕らは、沈黙を守ったままだった。

さつき。

なぜ、健人さんは僕に謝ってきたのだろうか。

たぶん、ひかりは僕に会いに行くとしたか言っていないはずだ。

僕達は付き合っているわけでも無い。

彼の勘違いなのだろう……。

そんな事を考えていても現状は変わらない。

今は、ひかりの事だけを考えよう。

そして、少し落ち着こう。

「すみません。一本いいですか？」

僕はポケットから煙草を取り出し、健人さんに尋ねた。

「ああ。私にも一本もらえるかい・・・？」

無言で彼に差し出す。

「はぁ・・・。」

肺に溜まった煙を真っ赤に染まった空に向かって吐き出す。

「昨夜、ひかりは本当に楽しそうだった。」

「へ？」

思わず聞き返してしまった。

「昨夜の夕飯、久しぶりに家族三人で揃って食事をしたんだ。」

「はい。」

「その時、君の事を話していたよ。」

「僕の事……ですか？」

この時まで想像もしていなかった。

ひかりが僕の事を話しているなんて。

「あの子、本当に楽しそうだったよ。」

胸が締め付けられているような気がした。

「いつもなんとなく過ごしている日々の時間が苦しかったのだろうか。ね。」

その感覚は分かる。

「でも、この前急に君の話をしてきたんだよ。」

たぶん、あの公園で再会した時の事だろう。

「いつも光が濁ったような目が、その日から濁りが無くなっていったんだよ」

この話をしている健人さんの表情は本当に優しく、不思議と目の奥が熱くなった。

「あの子が、君と離れ離れになった時の事を思い出したよ。」

あの時の僕らはきつとひどく濁った表情をしていただろう。

「そこでなんだが……。」

健人さんの表情が優しい顔から厳しい表情になる。

「どうしたんですか？」

なにかとても大切な事を言われるのだろう。

「高志君さえよければこれからもあの子に会って貰えないだろうか？」

「はい。」

「あの子は今、目を覚まさないでいるがそれでも大丈夫かい？」

「僕は彼女に救われた事が沢山あります。僕なんかで役に立てるのなら毎日お見舞いに来ます。」

真っ赤に染まった空の下、僕は健人さんにそう宣言した。

しばらく二人でくだらない事を話してひかりの部屋へと戻った。

しかし、僕には不安な事があった。

今の僕は、何もしていないただのニートだ。

こんな僕がひかりのお見舞いに毎日来ても意味があるのだろうか？

「はあ。」

こんな事考えるだけ無駄だな。

明日から勝負だ。

でも、今日はもう少しこの可愛い寝顔を見ていたい。

空の落し物

時は流れる。

世界に何が起こることも、時は流れる。

あの日から、一週間の時間が流れた。

僕は今焦り始めている。

あの日から変わろうとして、今まで避けてきた現実と向き合った。

最初は仕事を探し始める事から。

だけどもいまだに見つからない。

僕が出来ること。

小説を書くこと。

それくらいしか出来ないのだ。

他の事は全部初めて経験することなのだ。

でも、面接を受けた時点で僕の不採用は決まっていた。

それもそのはず。

空白の時間があるからだ。

その空白の時間を誤魔化す理由はたくさん考えた。

でも、どうやら僕は嘘をつくことが苦手なタイプらしい。

嘘を言つと顔が引きつってしまふようだ。

「では、採用の際には携帯電話の方に連絡をいたしますので、お疲れ様でした。」

「ありがとうございました。」

ガチャ。

バタン。

「はあ。
」

ドアの前で思わず溜息をつく。

ドアの向こうで微かに声が聞こえた。

すぐに怖くなり、その場を急いで歩きだした。

太陽がオレンジ色に染まり地平線の向こうへと消えようとしている。

そろそろ、ひかりの所へ行こう。

夕焼けを背に病院へと歩きだした・・・。

「危ない!!」

ところが歩きだそうとした瞬間、上方から大きな声が聞こえた。

ガチャン!

同時に僕の目の前に少し大きめのパンチが落ちてきた。

「・・・。」

声が出ない。

初めての経験だった。

「お兄さん！すまない！怪我はしなかった!？」

彼の声で目が覚めた。

「いえ、大丈夫です。」

「本当に申し訳ない。俺の不注意でこんな事になってしまった。」

「いや怪我もしなかったしもういいですよ。頭上げてください。」

彼は僕の二つか二つくらいしか変わらないだろうか？

「いや、俺の気がすまない。今日はちよつと急いでるから何も出来ないが、明日なら大丈夫だ。もし明日、用事が無ければここに連絡をしてほしい。明日で無くてもいい。いつでも連絡してくれ。頼む。」

彼はそう言うと、自分の名前の書かれた名刺を渡してきた。

「分かりましたから、頭を上げてください!！」

「そうか。じゃ、待っている。」

そう言うと彼は近くに止めてある車に乗り、頭を下げ僕とは逆方向

へと走り去った。

「ふかざわ深澤
ゆういち祐一か・・・。」

今度こそ歩きだす僕に、明日こそ良い事があるだろうか。

よっしん

「今日から、お世話になります。よろしくお願いします！」

「そんなに畏まらなくても大丈夫だよ。牧野君。」

温かい言葉と一緒に浮かび上がる笑顔。

今日からここから働くんだ。

「もしもし？」

「あの、先日の者ですけど覚えていますか？あのペンチの……。」

「あ！昨日はすまなかった。」

「いえ、気まぐれで電話してみただけですから……。」

本当に気まぐれだった。

飲み物を買おうとして財布を取り出した時、偶然目に入ったのだ。

これも自分が変わる為だと、自分に言い聞かせて彼に電話をした。み

「いや！気まぐれでも何でもいい。こうやって連絡をくれたのだからな。」

「でも、仕事でしたら申し訳ないです。」

「大丈夫。今ちようど仕事が終わった所だ。」

彼はとても気さくな人だ。

「ところで、今君は暇かい？」

「ええ……？暇ですけど。」

「君が今どこにいるのか教えて貰えないだろうか？」

「そんな簡単な事だったら俺に任せてくれ。」

彼の言葉に正直心が荒れそうになる。

「いや、それは僕がしないといけない事ですから。」

「牧野、君は根本的に間違っている。」

「何が間違っているって言うんですか！あ……。すみません。」

声が大きくなってしまう周りから見られている事に気がついた。

「大丈夫。間違っているというのはだな、君は一人で背負い過ぎて
いる。わかるか？」

「いえ、正直よくわかりません。」

「そうだな。簡単に言うとな、君は一人で全部解決できるのか？」

「と、言いますと？」

「うーん。君は一人で生きているのかい？」

彼の言葉が理解出来なかった。

僕が一人で生きている？

僕は、母がいて父がいて、ひかりがいて、ひかりの両親がいて……

一人で生きていないではないか。

「いえ。僕は一人で生きていませんよ。」

「わかっているじゃないか。俺達の関係も他人とは言えないよな？」

そうなのだろうか？

会って二日しか経っていないのだ。

「はあ。なんでお前はこころ頭が固いんだ。」

「なんなんですか！はっきり言って下さい！」

「もう、俺達は友達だ。」

彼はいつもいきなり過ぎる。

さっきの仕事を探しているという僕の話の事でさえ簡単だと言いつけた……。

そうか。

僕達は、悩み事を相談できるような仲になっていたんだ。

「ありがとうございます。」

「なんだよ。気持ち悪いな。」

「気持ち悪いは酷いじゃないですか。」

そうか。

友達とはこんなにも嬉しいものなのか。

「そうそう、お前の職場よかったら紹介するぜ。」

「本当ですか!」

「本当だから落ち着け。」

彼の笑顔が昨日より輝いて見えるのは友達になれたからなのだろうか。

でも、久しぶりの友達との食事は美味しく感じた。

二日後。

僕と祐一さんはある喫茶店の前に立っていた。

「ここが今日からお前が働く職場だ。就職って事ではないけど、頑張れ。」

「あ、おはようございます。この人が祐君が言ってた人？」

笑顔の可愛らしい女性が店の中から出てきた。

「初めまして。牧野 高志です。今日からお世話になります。」

「いえいえ、こちらこそ助かります。今日からよろしくお願いしますね。」

「ようこそ、ヒバリへ。」

ひかり。

今日も良い事があったよ。

だから、はやく・・・。

初仕事

カラン。

「いらつしゃいませ。」

大学生だろうか。

若い男性が来た。

「お、新しい人じゃん！」

「いらつしゃい。今日は、お客さん？」

彼女は桐谷 風子さん。

この店の店長みたいなものだ。

「うーん……。それより風子さん、いつになったら交際してくれるんですか？」

「あらあら。年下は興味ないのごめんなさい。」

「ふう。厳しいなあ。あ、初めまして僕この常連の佐藤 徹です。ちなみに大学3年生です。」

風子さんから話を聞くと、彼はよくヒバリに来る常連さんでたまに忙しい時手伝いをしてくれていたそうだ。

「そっかあ。寂しいねえ。とうとう、人雇っちゃいましたか。」

「ごめんね。徹君。」

「いや、そんな困った顔されても……。ねえ？牧野さん。」

「あはは。君はとてもおもしろいね。」

「それは、褒め言葉でいいんですか？」

「うん。大丈夫だよ。」

彼とは仲良くなれそうだ。

時間が流れるのは早く、彼が来てから2時間も経っていた。

客足も少しづつ増えてきた。

「うーん。そろそろ帰りますね。」

「もうちょっとゆっくりしていけばいいのに。」

「うーん。これでも学生なのでサボり過ぎるのは良くないかと・・・」

チラッと見た時計はすでに12時を過ぎていた。

「徹君、これからもよろしくね。」

「はい。それに、牧野さんなら風子さんと一緒に働いてても心配なところですね。」

「それは、僕が女性に興味無いように見えたのかな・・・？」

大切な人がいるとはいえ、少し落ち込んでしまった。

「いえいえ、なんか好きな人？うーん。大切な人がいるような感じですから。」

彼の笑顔は爽やかだ。

昔の友人を思い出す。

「徹君。時間大丈夫なの？」

「あ！今日も遅刻だなあ・・・。」

「徹君！」

「え？何ですか？牧野さん。」

「走れば大丈夫。」

彼に負けないように無理に爽やかに笑ってみる。

「そうですね。」

彼は小さく微笑んでいる。

「ごちそうさまでした。」

やっぱり彼の笑顔は爽やかだった。

年相応の爽やかさと言っのだろうか？

「ありがとう。また来てね！」

ここは居心地がいい。

素敵な所だ。

「さてと。片付けますか。」

「あ、風子さん。僕がやりますよ！」

「お疲れ様でした。また明日もよろしくお願いします。」

「お疲れ様です。じゃ、気をつけて帰ってくださいね。」

初勤務は何事も無く終わった。

新しい人にも出会えた。

本当に祐一さんには感謝してもしきれない。

「さてと、ひかりに会いに行きますか。」

昨日より僕は笑えているのだろうか。

充実感なのか達成感かはよくわからない感覚だけが、体の中を駆け巡っている。

でも、悪くない感覚だ。

うん。

昨日より笑えている。

この日、いつもなんか暗かった光が、オレンジ色に染まった太陽の光がいつもより輝いて見えた。

季節は秋

気がつけば、ヒバリで働き始めて5ヶ月の時間が流れた。

食欲の秋、読書の秋・・・。

秋の表し方は人それぞれだ。

僕の場合は目覚めの秋になって欲しい。

ひかりはまだ目覚めない。

医者からは詳しい説明を拒否された。

確かに僕は周りの人からすればただの友達なのだろう。

ひかりの両親からは、もう大丈夫なのだけれど後は本人次第だと説明された。

でも、実際のところ悪い予感しかしない。

ひかりは例えは悪いが、一生植物人間のままではないのか・・・。

悪いほうでしか現実を受け付けられなくなっていく自分自身に嫌気がした。

カラン。

「いらっしゃいませ。あ、徹君。今日はゆっくりなんだね。」

「今日は休みなんですよ高志さん。」

「そうなんだ。じゃ、今日は最後までいてもらおうかな。」

「それは片付けを手伝って事じゃないですか！若者を虐めるんですか？」

「いや、冗談だよ。」

彼とはいまでは名前で呼び合う仲になった。

祐一さんは、たまに顔を出しにくるが相変わらず憎めない人だ。

「そつだ。今日は風子さんはお出掛けでいないよ。残念。」

「え！いないんですか！最悪じゃないか……。」

「そんな落ち込まれると、僕の存在が否定されてるみたいで悲しいんだが……。」

「いや！違いますよ！風さんに会いに来たついでに高志さんに挨拶

する感じかなあ……。」

「いや、もういいよ……。」

彼の言葉は反対の事を言っている時に笑う癖があるから分かりやすい。

実は彼は風子さんの事が結構苦手らしいのだ。

嫌いではなく、女性が苦手らしい。

それでもヒバリに来るのは、このコーヒーが好きだかららしい。

「そういえば、高志さん。彼女さんの様子はどうですか？」

急に深刻そうな顔になったと思ったらそんな事を聞いてきた。

「相変わらずだよ……。あと、彼女ってわけじゃないんだよ。」

「え！そうなんですか？てっきりそうなのかと……。」

「違うんだよ。まだ何も伝えてない。」

「……でも……。」

「僕は彼女の事好きだよ。たぶん彼女も気持ちは僕と同じはず。僕達は、どこかよく似ているところがあるからね。」

「それって……。ううん。なんか羨ましいです。そんな想える人がいて……。」

「君はまだまだこれからだよ。僕は、そう思うよ。」

「ありがとうございます。」

「徹君が落ち込んでしまっただろうと思うんだよ。」

「いや、だって……。」

彼は優しい。

きっと彼と一緒にになれる人は幸せになるだろう。

「よし！この話は終わり！」

「そう……ですね。」

カラン。

「いらっしやいます。」

俺は何が言いたかったんだろうか。

高志さんは尊敬できる人だ。

高志さんにはお世話になりっぱなしだ・・・。

きっと高志さんの想い人は綺麗な人なんだろう。

彼自身もとてもかっこいい。

男の俺がそう思えてしまうんだからそうなんだろう。

だから、彼女に早く目を覚まして欲しい。

彼を早く幸せにして欲しい。

高志さんと過ごした時間は短いからそう思える人だ。

何だろう？

これは憧れなんだろうか・・・。

きっと本当の自分を出せる数少ない人だからだろう。

俺は何がしたいんだ。

俺はなにをしている。

心の中に霧がかかった物が嫌いだ。

一生懸命頑張っている彼を見ていると心が苛立つ。

自分自身に苛立つ。

「本当に何がしたいんだよ。俺……。」

離れた席に座るお客さんの接客をする高志さんの姿はやっぱり俺には眩しくて、目をつぶってしまった。

窓の外には綺麗な紅葉。

俺の心はなんだか切ない。

雪の降る日の出来事

最近の朝は、暗い。

仕方がない事だ。

冬になれば夜が長くなる。

夏ならばその逆。

シユル……。

ネクタイは久しぶりだ。

でも、今日は会議に出ないといけない。

疲れる。

「じゃあ、母さん行ってきます。」

小さな本棚の上に置いてある写真立てに小さく語りかける。

5年前に癌で亡くなってしまった母はとても優しく、いつも笑っていた気がする。

怒られた回数は数え切れないほどある。

けど、理想な母親だった気がする。

この命が燃え尽きてしまい、次の人生でもまた母の子供になりたい
とそう思える人だった。

「朝から女々しい事を考えて・・・。馬鹿馬鹿しい。」

今日も行くか、ヒバリに。

「今日は、雪が降りそうだな。」

カラン。

「いらっしゃいませ、徹君。」

「おはようございます。風さん。あれ？高志さんは休みですか？」

「おはよう。ううん、今日はちょっと遅刻。彼女さんに会いに行ってるわ。」

「そうですか。じゃ、いつものやつお願いします。」

彼女の事は好きだ。

恋愛とかそういうのではなく、人として好きだ。

でも、女性は苦手だ。

どのように対応していいかわからない。

神様も意地悪な方だ。

なんで男みたいにもっと単純な生き物にしてくれなかったのだろう。

。まあ、そのほうが世の中狂い出さなくてすんでいるのだろうか……。

「はい、どうぞ。今日も学校遅刻かな？」

「酷いな風さん。今日もって……。まあ、そんな感じです。」

今日は昼から会議に参加しないといけない。

父は会社を設立し、それなりに成功した人だ。

会議って言ってもそんなものは名ばかりで実際はただの食事会みたいなものだ。

俺のような若造が参加していいのかよくわからない。

でも、父の意志だ。

きっと俺の事を後継者にしたいのだろう。

親なら誰だってそうか・・・。

でも、父の事は嫌いだ。

ここまで育ててきてくれた事は素直に感謝する。

でも、あの人は仕事が忙しいという理由だけで母の葬式にすら顔を出さなかったんだぞ。

「徹君、どうしたんだい？そんな怖い顔して。」

どうやら俺は、自分の世界に入りきっていたみたいだ。

「あ、高志さん。遅刻ですね。」

「ごめんごめん。今日は良い事があったからその報告にね・・・。」

「

「そうですね・・・。」

高志さんが来た事も気が付かない程、考えこんでいたのか。

「今日は、どうしたの？いつもと様子が違うけど？あ、ごめん。聞かれましたか？」

「え・・・？あはは。ほんと敵わないな。いえ、大丈夫ですよ。」

「そうか。でも、言いたくなかったら言わなくていいんだよ。言いたい時に言えばいいよ。」

ああ、本当に彼はかっこいい。

本人は否定するのだろうけど、誰が見てもかっこいいと言えるはずだ。

抱えきれない不安や恐怖、悲しみを背負っているはずなのにそれを見せないのはやっぱり大人だからなのか・・・。

「はい。ありがとうございます。」

いつも一人で病院へ歩く姿が目につく。

でも、彼は最愛の人に逢いに行っている。

それが、彼の強さなのか・・・。

それは、彼にしかわからない・・・か。

今日の徹君はいつもと様子が違った。

なんだか、怒っているようで悲しそうだ。

さっきは無理に聞きださなかったがやっぱり気になる。

人はそれぞれ悩みを抱えている。

ふとそんな事が頭に浮かんだ。

うん。

彼が自分から話すときまで待とう。

僕の悩みはなんだろう？

考えなくてもわかるか・・・。

早く目覚めて欲しい。

それだけだ。

「高志君！早く来て！！」

「あ、雪だ。どおりで今日は寒いわけだ。」

初めて見るお客さんがそんな事を言っていた。

何故かこの時この人の雪という単語に耳が反応してしまった。

横目で見た窓の外は白い天使達がゆっくりと舞い降りていた。

喜びと悲しみはどこか似ている

小説本文

「どうしたんですか！」

風子さんは電話の前で立っており、自分で叫んでいながら僕が声をかけるまで僕の存在に気づかなかった。

僕に気付いた風子さんは叫んでいたのにも関わらず微笑んでいた。

「はい。高志君に電話よ。」

「え？あ、はい。ありがとうございます。」

「私は仕事に戻るわね。」

結局、彼女は最後まで笑顔だった。

「もしもし、お電話代わりました。牧野です。」

「もしもし！高志君！ひかりが！ひかりが……！」

「どうしたんですか！朋美さん！少し落ち着きましょう。」

「ふう……。高志君？ごめんね。やっと落ち着いたわ。」

「いえ、大丈夫ですよ。それよりひかりに何かあったんですか！」

「うん。ひかりが、やっと目覚めたのよ！」

ひかりの母朋美さんは、これでもかと言つ程興奮していた。

でも、それは仕方のない事だ。

僕も声には出していないが、かなり興奮していた。

いや、実際のところ興奮というより驚きと喜びで何も喋れないでいた。

しばらくすると、僕も漸く落ち着いたので目の奥からじんわりと温かいものを感じ取れた。

「高志君？」

朋美さんの声で漸く、自分が受話器を持ったまま泣いている事に気が付いた。

「あ、すみません。良かった……。本当に良かった……。」

僕の声は震えているのだろう。

「高志君？ありがとうございます。」

朋美さんは急にお礼を言ってきた。

「え？何がですか？」

「あの子の為に泣いてくれているのでしょっつ？」

「あ……。はい……。」

朋美さんに言われてなんだか急に恥ずかしくなった。

「あなたでよかった……。」「

「え？」

「いえ、何でもないわ。今日、仕事早く終われそっつ？」

「たぶん夕方には終わると思いますよ。」「

「待ってるわね。」「

「はい。」「

ガチャ。

受話器を戻した後、僕は嬉しさからなのかこの苦しい日常から開放されたからなのかわからないが、電話の前でしばらく泣いていた。

「高志君？」

どれくらいの時間が流れたのだろうか……。

厨房の入り口で風子さんが不安そうに僕を呼んだ。

「すみません……。」

「ううん。それより、出前お願いできるかな？」

「え？出前ですか？」

たしか、ヒバリは出前はやっていなかったはず……。

「うん。住所はここ。近くだからすぐ分かると思うわ。」

風子さんはなんだか嬉しそうに、でも少し悲しそうに微笑んだ。

「わかりました……。」

風子さんから手渡されたメモ書きには見たことのあるような住所。

「あ、それと途中で向かいのケーキ屋さんで好きなの買って持って行ってね。」

何故かお金を渡され、出前のはずなのに店の品物はなにも渡されずに店から追い出されるように見送られた。

向かいのケーキ屋さんはお昼時のせいなのか客が見当たらなかった。

「ありがとうございました。」

若い男性の店員に見送られ、メモ書きの住所へと急いだ。

カチッ。

ポケットから携帯を取り出し住所を調べる。

調べるとすぐに分かった。

見慣れた病院の名前がそこにはあった。

「風子さん、ありがとうございます……。」

彼を見送った。

なんだか力が急に抜けてしまった。

いきなり座り込む私を心配してか、徹君が慌てて近づいてきた。

「風さん、どうしたんですか？」

「徹君……。高志君行っちゃった……。」

今、私はどんな顔をしているんだろう。

聞かなくても分かるか……。

頬に温かいものを感じ取る事が出来た。

彼の事が好きだった。

彼と初めて会った時。

一目惚れだった。

彼と話をしているうちにどんどん惹かれる自分に嘘を付き通した。

でも、抑え切れない感情に戸惑う自分に情けなく思ったりもした。

でも、彼は言った。

大切な人がいると。

日々高まっていく感情。

本当に情けなくて、悲しくて。

彼の幸せを願うだけ、その相手が自分であればいにとどれだけ願ったか……。

さっきの電話は彼の大切な人の家族なのだろう。

嬉しそうな声を憎く感じてしまう自分がどこか恐ろしかった。

でも、漸く決心できた。

最高の笑顔とは言えないが笑顔で送り出せたはずだ。

「あはは。ごめんね、徹君。今日はもうお店閉めるね。」

運がいいのか悪いのか分からないが、お客さんは徹君だけになっていた。

「風さん……。大丈夫ですよ。もう看板はcloseにしときました。」

「ありがとうございます。」

「いえ、今日は付き合いますよ。」

微笑む徹君に、心の中で感謝した。

私は、子供のように泣いた。

しばらくすると、泣いていた事が恥ずかしくなるだろう。

でも、今は泣きたい。

それでも私は、女の子なのだ。

次の恋を見つける為の涙だ。

きつと恥ずかしくない。

クリスマスには、みんなで騒ごう。

彼の大切な人も一緒に。

きつと楽しいはずだ。

白銀の世界へと移り変わった景色はいつもより綺麗に見えた日だった。

ありがとう。

そして、これからもよろしく。

昔と今の違い

長い夢を見た。

彼も私もまだ子供だった。

一人で石垣島に行った時の夢だ。

まだ私も彼も本当の事を知らない頃だ。

高志君の両親はとても素敵な人で、とても元気をもらえた。

日々、体から体力がなくなっていく感覚。

ギラン・バレー症候群。

最初は何を言われたのかまったくわからなかった。

簡単に言えば、手足の痺れや呼吸困難、力が入らなくなる。

この病気は今ではすぐ治る病気だ。

断定は出来ないが……。

何か、先行感染で感染してしまう事があるらしい。

この事を隠していた父と母はどんな思いだったのだろうか。

あの頃、ホテルで急に胸が苦しくなり始め呼吸が出来なくなったりしたこともあった。

最初は過呼吸だと思っていた。

さすがに足が動かなくなったり、手足の痺れはあまりなかった。

唯一の救いが高志君の前で症状が出なかった事だ。

私は少し長いお別れで外国から帰ってくればまたすぐに逢える。

何故だろう？

そう思っていた。

きっとあの頃はお互いがどうしようもない程好きでいたのかもしれない。

あの頃は梢しほさんも弘ひろ一いちさんも高志君もみんなが優しく、一人で寝るホテルは寒くて寂しかった。

「ちよつと、父さん！勝手に決めないでよ！ひかりにもちゃんと聞いてから・・・！」

高志君の慌てる姿おもしろかったな。

あのパスタ屋さんまだやってるかな……。

イカスミのパスタが今日のおすすめってなんだか妙な感じだったな。

サービスでもらったタコライス美味しかった。

でも、駄目だな私……。

もう彼には逢えないのにまだ彼の事を想っているなんて……。

でも、思い出があれば強くなれるか……。

なんだろう。

まだあの頃の事見ていたいのになんとか誰かが呼んでいる……。

もう起きないと駄目なのかな……。

「ひかり……！」

急に大きな声で誰かの名前を呼ぶ女性の姿が目に入った。

誰だろう……？

「ひかり。良かった。心配したんだぞ。」

次に目に映ったのは男性。

彼らは何をそんなに喜んでいるのだろう。

それより此処は何処だろう？

消毒液の匂いがする。

病院だろうか？

でも、何故こんなところにいるんだろう？

「ちょっと、高志君に連絡してくるわ！お父さん！ひかりよろしくね！」

「ああ。朋美少し落ち着け。」

「そんなに落ち着いているあなたが変なのよ！とりあえず行っていくから！」

男性の顔が少し悲しそうに見えたのは何故だろう……。

「さて。どうしたひかり？少し様子が変わだぞ？」

私に向かって言っている。

今更ながら自分が誰なのかわからない事に気が付いた。

「え．．．！あの．．．。私は誰ですか？」

私は男性の悔しそうな、悲しそうな、そして泣き出しそうな顔を初めて見た。

ここまで心から辛く感じたのは恐らく初めてだろう．．．。

「すまん。一人にしても大丈夫か？あと、ここは病院だ。」

「病院……。はい。大丈夫です。私も少し考えたいので……。」

いろいろな話を聞いた。

どうやら、彼と先程の女性は私の両親らしい。

そんなこと言われても信じられる事なんてひとつも無かった。

でも、彼のおんな顔を見てしまうと嫌でも信用してしまうだろう。。。

それとも、記憶は無くても何処かで覚えているのだろうか。。。

急に、頭に知らない男性が浮かんだ。

「あの人は誰・・・？」

窓の外は綺麗な白銀の世界が広がっていた。

震える身体を両手で抱きしめ、窓の外を眺めていた。

親不幸者

「娘さんは、体の方は心配ないですよ。完全に回復してます。でも、記憶の事は私には何も出来ません。すみません。」

「そうですね……。ありがとうございました。」

妻の朋美が出て行った後、ひかりが目を覚ました事を医者に報告した。

すると、すぐにいろいろな検査が行われた。

しかし、結果は記憶意外は完治しているという事。

記憶は何がきっかけで戻るかわからないらしい。

自分の家で普通に生活をしている時、寝て翌日起きたら戻っていたなんて事もあるらしい。

本当に不思議な話だ。

気付けば、ひかりと俺だけになっていた。

朋美はまだ電話でもしているのだろうか？

「あの……。すみません。」

「どつした？」

「私ってなんで入院していたんですか？」

ひかりのそんな質問から、今までの出来事を話した。

「すまん。一気に話をしてしまったがわかるか？」

「はい。なんとか大丈夫みたいです。」

「そうか。」

「でも、私ってドジなんです。車に飛び込むなんて。」

可笑しそうに笑うひかりはどうか勘違いをしているようだ。

でも、久しぶりのひかりの笑顔になんだか安心してしまった。

「ひかり。」

「はい？」

「医者の話だと、今日退院しても大丈夫みただけどどうする？」

「うーん……。明日退院でも大丈夫でしょうか？いろいろと気持ちの整理をしたいので……。」

「そうか。わかった。」

一人にしてしまって大丈夫だろうか。

確かに一人で考える時間は大切だと思う。

心配し過ぎか……。

ひかりも子供じゃないんだし、自分なりの答えが見つけれらるだろう。

問題は、高志君だ。

どう説明すればいい……。

朋美もまた泣き出すのだろうか……？

「はあ。問題が山積みだな……。」

「え？」

「いや、なんでもない。独り言だ。」

ガラッ。

「ねえ。お父さん、高志君今仕事中だから夕方まで来れないみたい。」

「

「それは仕方ないだろう。彼だって遊んでいる訳ではないのだから。」

「そうねえ。でも、あの人がなんだかんだ言っただけで私達より心配してた気がするわ。」

「そうだな。ひかり、今日はもう帰るからお前はゆっくりしてなさい。」

「え？なに言ってるの？やっと起きたのに帰るだなんて。本当に何考えてるのかしら？」

可笑しそうに笑う妻の姿に心が痛かった。

「いいから。じゃ、ひかり。明日また来るからな。」

「は、うん。」

「ちょっと本気なの！」

うるたえる妻の手を握り病室から抜け出した。

あの人は、父？は何を考えているのだろうか？

彼女の喜び方といい。

彼女にとって、私の記憶喪失は泣き出してしまいくらいショックな出来事なのだろうか？

わからない。

初めて会った人の事なんてすぐにわかる訳がない。

でも、少なくとも私は親不幸者だと思う。

なんでもかはわからないけどそう思う。

きっとあの人も心配しているのだろう。

あの人？

誰だろう？

さっき母が言っていた高志？という人なのだろうか……？

考えてもわからない。

仕方ないか。

気分転換に空気の入れ替えをしよう。

雪入ってこなければいいけど……。

カラカラ……。

やっぱり雪が降っているくらいだ、とても寒い。

「はあ。」

口から白い煙が出た。

なんだか可笑しくて何回もやってしまった。

「何やってるの?」

笑いを含んだその声になんとか恥ずかしくなり、慌てて振り返った。

「おはよう。ひかり。」

彼は誰だろうか?

でも、なんだか知っている気がする。

なんで知っているのかはわからない。

でも、私は何も答えられないまま彼を見つめ続ける事しか出来なかった。

遠くに車の通る音を聞きながらいつまでも、何も答えられなかった。

心情

「ここに来る途中で買ってきたんだけど、目覚めたばかりだからちょっとキツイかな？」

彼は嬉しそうに小さな箱を備え付けのテーブルに置いた。

「あの……。」

「ああ、そうだ。健人さんと朋美さんはどうしたの？」

彼は不思議そうな顔をしていた。

「えと、さっき帰りました……。」

「帰ったの？待ってるって言っていたんだけど……？」

「はい。なんか慌てて帰っていききましたよ。」

「そっか……。なんか様子が変わんだけど、どうしたの？」

記憶があった時の私は彼にどんな口調で、態度で接していたのかわからない。

彼は少し年上のように感じる。

何処か落ち着いた雰囲気からのだろうか。

「ひかり?」

「は、はい!」

「どうしたの?やっぱりなんか変だ。もしかして無理して起きてる?」

「いえ、ちょっと混乱してて・・・。」

「そっか。少し横になったらいいよ。」

「すみません。」

彼に言われ、眠くも疲れてもいないのに横になった。

ひかりの様子がおかしい。

落ち着かない様子。

やっぱり無理をして起きていたんだらうか？

でも、顔色もよかったし体調が悪いとも考えられない。

そして、一番の違和感はひかりが僕に対して敬語を使っているということだ。

あの日。

あの日の事で申し訳なく思っているのだらうか？

ひかりなら、それも考えられるな・・・。

なんだか可笑しく思えた。

「あれ、おとうさん。お店閉まってるわよ。」

「本当だ……。」

まさか、彼はもうひかりのいる病院に行ってしまったのだろうか。

「朋美！電話！」

「誰に電話するの？」

「高志君だよ！早くかけてくれ！」

「なにをそんなに焦っているんだか……。」

朋美はぶつぶつと言っていたが電話をかけてくれた。

「あ、高志君？ちょっと待ってね。はい。」

朋美から電話を受け取る。

「もしもし。高志君か？」

「はい。どうしたんですか？」

「君はもう病院にいるのか？」

「ええ。ひかりにも逢いましたけど、疲れてたみたいなので今は寝ていると思いますよ？」

彼はまだひかりの異変に気が付いていないのだろうか？

少なくとも違和感を感じているはずだ。

「あの……。武人さん。」

「なんだ？」

「ひかりは目覚めた時何か言っていましたか？」

「いや……。なにも言っていなかったよ。」

「そうですか。」

「ああ……。高志君。話があるんだ。いまから君が働いている喫茶店の前まで来れるか？」

「え？まあ、大丈夫ですよ。」

「じゃ、待ってるよ。」

先に彼に伝えるべきか、それとも朋美から伝えた方がいいのか……。

「朋美。いまから、高志君がここに来るんだがお前はどつする？」

「男同士の話の邪魔するのもなんだし、私は先に帰っているわ。」

「わかった。」

高志君に伝えた後に、朋美に伝えよう。

以前の、ひかりが倒れた時の状態に戻らなければいいのだが……。

あの頃の朋美は毎日泣き続けていた。

痛々しいほどに。

何もしてやれない自分がどれだけ許せなかったか。

また、同じ思いをするのは嫌だ。

ひかりの事は大切なのだが、あの時ほど娘に対して怒りを感じた事はなかった。

父親としてどうなんだろうな……。

自分自身が嫌いなるよ……。

しっかりしないと。

いまこの事実を知っているのは、ひかりと俺と数人しか知らない。

本人からつたえてくれればどれだけ楽だろうか……。

しっかりしなくては。

「はぁ……。」

「どうしたんですか？溜め息なんか吐いて。」

「あまり年寄りを驚かすのは感心しないな。高志君。」

「すみません。そんなつもりはなかったんですが……。」

「冗談だよ。そういえば、今日はここ休みなんだな。」

「え？ヒバリなら営業中だと思いますけど……。閉まってる。」

彼はここが休みだということに気が付いていなかったようだ。

「どうしたんだろっ？」

「まあ、休みなら仕方ない。何処かに入ろっ。たぶん長話になると
思っから……。」

今から話す事は彼にとって辛い事実と共に、俺への怒りが湧き上がる事だろう。

だが、いつまでも逃げ続ける訳にはいかない。

本当のことをちゃんと伝えよう。

それが、自分自身を納得させるための事になるから……。

あれだけ青かった空はいまでは、雲で覆い被され今にも雨が降り出しそうだった。

闘病

僕と健人さんは駅前の小さなカフェに入る事にした。

「すまん。時間は大丈夫か？」

「ええ。大丈夫ですよ。待ってるって言ってたから、病室にいないで驚きましたよ。」

「ああ……。」

健人さんの様子がどこかおかしい。

普段から、無口であり笑わないがここまで真剣な顔は初めて見た。

いや、二度目か……。

ひかりが入院した時もこんな顔をしていた。

「昔の話をしてもいいかい？」

「え？はい。大丈夫ですけど。」

「じゃ、ひかりが石垣島で一人で行った時の話なんだがいいかい？」

「はい。」

最初は驚いたが今度はしつかりと返事をする事ができた。

「ひかりからは、あの時仕事の都合で外国に行くことになったと聞いたと思う。」

「はい。そう聞きました。」

「実はな、あの時ひかりは病気だったんだ。」

「え？それって……。」

昔の話と言うから完全に気が抜けていた。

それよりも病気とはどういう事だろう……？

でも、今にして思えばあの時の外国へ行くという事は絶対にありえない事だという事に気が付いた。

なぜなら、健人さんも朋美さんもそういう仕事ではなかったからだ。

「実はな、ひかり本人もあの時は病気の事は知らなかったんだ。」

「いや、それより病気って……。今はもう大丈夫なんですか？」

「ああ。もう大丈夫だ。」

「そう……ですか。」

「少し長くなるが大丈夫か？」

いきなりの話とひかりが目覚めた事はなにか関係があるのだろうか？

わからない。

とにかく話を聞かなければ。

「はい。」

返事をする事に少し戸惑ってしまったがしっかりと返事をする事ができた。

「うん。」

あの頃石垣島に行く前にあの子は風邪をひいていたんだ。普通の風邪だ。でも、風邪が治った翌日から少しずつ症状が出始めた。まず立ち上がれなくなったりした。そして手足が痺れ出していた。すぐに入院させたかったのだが、あの子は前から楽しみにしていた高志君に逢いに行く短い旅行を楽しみにしていたんだ。そんな姿を見ていると病気の事を言い出せなかったんだ。

あの病気の闘病生活は長くなることを知った俺は、ひかりに外国へ行くという嘘を言った。

君に逢えなくなる事を恐れていたあの子の為にと思っていたんだけどな……。

この病気は今では治療方法はあるが、うーん約5%だったかな？死亡例もあるらしい。

もちろん俺も朋美もひかりがその5%に入る事は絶対に無いと思っていたよ。

でもな、この病気は完治するのに最低5ヶ月から1年くらいだと言われたよ。

君にその事を伝えてもよかったんだが、あの時は君もあの子もまだまだ子供だったからな。

そんな事を言えば君は意地でもひかりと共に闘病生活の日々を送っていたはずだ。」

確かにあの時の僕はまだまだ子供だった。

目先の幸せばかりを追いかけてその先の事なんて何も考えていなかった。

二人一緒にいればなんだって乗り越えられるそう思っていた。

それは今でも変わらないのだが、あの時と違う事もたくさんある。

それは、社会に出なければわからない事だったのかもしれない。

「それでな、ひかりに嘘をついて外国に行くことになったという事

にした。
簡単に言えば君にお別れをして来いという事だな。

君が子供のころは会った事も2回くらいしかなかったからな。
ひかりから聞いた話でしか君の性格はわからなかった。

でも、君もあの子も何処か似ていて可笑しかったのを覚えているよ。
それで君の事はなんだかわからないうちに信用しきっていたよ。

突然だが、ひかりは石垣に行った時、様子がおかしくなかったか？
そう言われてあの時ひかりはよく箸やスプーンなどを落としていた
事を思い出した。

「確かに、スプーンや箸をよく落としていたと思います。」

「たぶん身体中の痛みも我慢していたはずだ。
俺はこの病気になった事がないから、想像でしかその痛みはわから
ない。」

あの子が石垣から帰って来た時かなり無理をしていた事がすぐにわ
かったよ。

すぐに入院して、末梢神経伝導検査、髄液検査をしてすぐに治療方
法が決まったよ。

免疫吸着療法。

免疫吸着治療法は首の太い静脈から血液をとりだし、原因となつて
いる抗体をフィルターでこしとった後、血液を体内に戻す。

それを7日に分けて行い、1回の治療で2〜3時間かかり、治療の

間じつとしていなければならぬ上に、機械がセンシティブで何度も止まり、いらいらとしたよ。

精神的にとてもつらい時間だった。

治療をしたにも関わらず症状に改善がみられないかった。

ボツリヌス菌の感染、中枢神経系の障害の可能性もあるとのことだったが、MRIだったかな？

それでギラン・バレー症候群という事がわかった。

病院側にはガンマ・グロブリンの投与も検討してもらったが、結果的には徐々に改善し始めたからガンマ・グロブリンの投与しなかった。

ガンマ・グロブリンとか言われても全然わからないだろう？

俺もあの子が良くなっていくならと思ひ、説明を聞いていなかったから詳しくはわからない。

改善したといっても目に見えた回復は全然なかった。

それから、どんどん痺れや痛みが増したのか、痰がからみ食事や睡眠がほとんどとれなくなっていたよ。

それから呼吸が苦しそうになり、肺活量が低下してきたため、人工呼吸器を挿管した。

この時点であの子は完全に寝たきりとなり、動かせるのは首と手首から先だけになっていたな。

意識がはっきりしているのに体が動かないというのは、どういう感覚なんだろうな……。

人工呼吸器をつけているから発声ができない。

コミュニケーションをとるのに苦労していたよ。

夜間は点滴で麻酔を限界量まで入れていたが、不定期にくる腕の強い痛み、頻繁にからむ痰のために、ほとんど眠れてなかったと思う。不安も大きかっただろうな。

それから、手足も動かせなくなっていったよ。

はあ。

大丈夫かい？

いきなり過ぎて混乱しているだろう。

少し休憩をいれようか。」

「はい……。」

これだけ話をしてもらって、妙に心に引っかかっていたものが取れた気がした。

でも、なぜこんなことを今話すのかが全然わからない。

すっかり温くなってしまったコーヒーを一口飲み、窓の外を見る。

雨の日独特のアスファルトの匂いと心地のいい雨音が辺りには響きあっていた。

寒空

「高志君。そろそろ続きを話そうと思うのだが大丈夫かい？」

「はい。お願いします。」

「わかった。」

えっと、どこまで話したかな・・・。

ああ、手足が動かなくなつた所だったか。

まあ、これは退院してからあの子に聞いた話だが、ギラン・バレー症候群は主に運動神経が障害される病気。

簡単に言ってしまうえば、神経に関わる病気だと思ってくれ。

あの子の場合、感覚神経も侵された。

手先、足先に近づくにつれ触圧覚、温度覚、痛覚が感じれなくなつたそうだ。

それから、体の位置の感覚もおかしくなつて体がまっすぐになつていゝるのに曲がつていると感じたり、片方の足がもう一方の足の上に乗っていないのに乗つていると感じたりとかもあつたみたいだ。

それからしばらくして、呼吸の回復がみられた。

人工呼吸器挿管の抜管をした。

まあ、この時もいろいろあつたが正直俺も仕事が忙しかったのもありよく覚えてない。

すまない。

そして、入院してから1ヶ月間以上経った。

あの子は寝たきりで栄養点滴を続けてたから、体重が激減してしまつて見ているのが辛かつたよ。

それからは、徐々に回復していき、食事も出来るようになった。

しばらくして完全にはいかなくとも、多少回復しリハビリをできるまでになった。

それからすぐに、回復期リハビリテーション病院に転院する事になった。

リハビリをしていたあの子は一生懸命で見えて嬉しかったと言つていいのだろうか……。

よくわからないな。

ギラン・バレー症候群は、治療が終わるとリハビリをするしかないらしいからな……。

三ヶ月くらいであの子はやっと車椅子を自力で動かすことができた。

あの子の場合、下半身より上半身の方が早く回復したらしく日記とかを毎日楽しそうに書いていたよ。

それからは歩行訓練は順調に進み、始まってから1ヶ月ほどで歩行

器を使用して院内を歩き回れるようになった。

まあ、いろいろあったがしばらくして漸く退院することができた。
退院といっても完全に回復はしていなかったよ。

あの子は少し右手に後遺症が残っていてね、利き腕だけに食事の時は大変そうだったよ。

それからは、普段通りの生活に戻ったよ。

ふう。

こんな感じかな。

少し忘れていた部分があるから、完璧に話せたとは思わないがこんな感じだ。」

「そうだったんですか……。」

「おいおい、高志君が落ち込んでどうする？それに昔の話だから、今はもう大丈夫だよ。」

健人さんの話を聞いてひかりの事が、僕の知らなかったひかりの事を知る事ができた。

でも、それは喜んでいいものなのかどうかは正直よくわからなかった。

「高志君、お腹すかないか？」

「へ？はい。」

「あと、久しぶりにちよつと。」

健人さんはそう言うと、お猪口をもって飲むような素振りを見せた。

「いいですね。たまには、ひかりが目覚めたお祝いも一緒にしましょうか。」

健人さんの笑顔を久しぶりに見た気がする。

ずっと張り詰めていたような雰囲気がちよつとだけ無くなっていたような気がした。

でも、なぜなのだろうか。

急にこんな話をしたのは。

今まで話をする時間はたくさんあった筈だ。

なんでこんな時に。

今はそんな事は考えるのはやめよう。

今日はお祝いだ。

一人になった時にでも考えよう。

「健人さん。」

「なんだ？」

「まさか、いまから飲むんですか？」

「当たり前だろ？」

彼の行動はたまにわからなくなる。

でも今日はお祝いだ。

健人さんに付き合って飲むのも久しぶりだし、ゆっくり飲むことにしよう。

これから良い事だけが待っているように願いながら……。

白い草原が続いている。

あの光は何だろうか？

歩いて近づいた。

あれ？

確かにあの光まで歩いて来たはずなのに光は全然近づかない。

あれはなんだろうか？

蒼くて神秘的な光を放つあれはなんだろうか？

手を伸ばしてみた。

指の隙間から見える光。

近くにあるはずなのに遠くに見える。

あの光はなんだろうか？

どこまでも続くこの草原で唯一の道しるべ。

そう思うのはなんでだろう？

あの光しか周りには何も無いから？

空を見上げる。

辺りは白く輝いているはずなのに、空はなぜ黒いのだろう？

わからない。

わからない。

僕は誰だろう？

あの光に触れられたらわかるのだろうか？

今はあの光を目指そう。

少しずつゆっくりと時間ならたくさんある筈だ。

でも、少し眠たいな。

少し眠ってからあの光まで歩こう。

白い孤独のその先に

「ひかり。準備できた？」

「はい。もう大丈夫だと思います。」

今日は退院の日。

これからの生活が不安だ。

何もかも今の私にはわからない事だらけだ。

「お母さん。」

「どうしたの？」

「えと、家ってこっから遠い？」

「そこまで遠くはないけど、車で15分くらいってところかしら？」

本当はこんな事を聞きたかったんじゃない。

私はこれから一緒に生活するのに邪魔じゃない？

そう聞きたかった。

母は、私の記憶を失った事に対して少し悲しい顔をしたくらいだった。

実際のところ、どうなのだろう・・・。

「じゃ、行きましょうか。」

「はい。」

きっとこれから先、私は両親に迷惑をかけ続けるだろう。

記憶が戻ってもたぶん……。

これから過ごす場所は母の言う通り車で15分程の場所だった。

「どうしたの？ひかり。」

「え？うつん。なんでもないです。」

「ふーん。変な子。」

母はなんだか嬉しそうだった。

今日から、新しい生活。

私にとって新しいスタートだ。

「ただいま。」

辺りは、太陽の光に反射する雪が輝いてなんだか幻想的だった。

まだ眠たい。

目を瞑っているのに何かが輝いて僕の眠りを邪魔をする。

何だっけ？

僕は何でこんな冷たい場所で眠っているんだろう。

そっだ。

僕はあの光の場所に行こうとしていたんだ。

両腕で体を一生懸命起こす。

でも、力が上手く入らない。

なんだか自分の体が自分の体じゃないみたいだ。

なんとか立ち上がった。

でも、歩く事が出来るのだろうか？

今の僕にはあの光しか目標がない。

頑張らないと。

覚束無い足元。

頑張らないと。

でも僕は何で頑張っているんだろう？

誰もいない広くて美しい白い草原。

僕は一人で何を頑張っているんだろうか。

諦める事も、頑張る事も、何もかも全部捨ててしまおう事さえ出来るこの場所で。

でも、あの光に触れる事が出来れば何かわかる気がする。

うん。

進もう。

ゆっくりでいいから。

時間はたくさんある筈だ。

何処なのかもわからないこの場所で孤独なのは辛い。

ああ、そうか。

僕はきつと寂しいんだ。

そうか。

蒼い光はきつと僕の望みを叶えてくれる気がする。

頑張ろう。

いつの日かこの孤独が無くなるなら……。

彼

優しい風が通り抜けた。

あれからどれだけの時間が経ったのだろうか。

思い出しても、今では涙も出てこない。

思い出になってしまったのだろうか。

ふわりふわりと、タンポポの花が風で揺らされているように生きていた気がする。

こんなにも昔の事を懐かしく思える事は老けてしまったからだろうか。

白い雪も、薄い桃色の桜も、あの人の事も。

変わらない景色なんてものはひとつも無くて。

ゆっくりと流れる時間のように人も街も自然も全て変わり続ける。

僕は進めているのだろうか。

それとも、本当に進んでしまったのだろうか。

きつと、これから変わり続けるのだろう。

「ひかり。」

「どうしたんですか？」

「今日は、ちょっと遠くへ行かないか？」

「ひばりヶ丘。ひばりヶ丘……。」

久しぶりだ。

この駅も、この景色も、この匂いも。

「少し歩くけど大丈夫？」

「はい。気分転換にもなって良いと思いますし。」

記憶を失くした彼女は以前の彼女より明るい気がする。

それとも今の姿が本当の彼女なのかもしれない。

歩いて30分くらい経っただろうか？

ようやく目的地についた。

「ごめん。少しって言ったのに結構時間かったね。」

「ううん。知らない町に知らない風景でなんだか冒険しているみたいで楽しかったですよ。」

彼女はよく笑う。

以前の彼女はよく笑っていただろうか？

もう、覚えていない……。

時間が長いこと止まっていたからだろうか……？

「ひかり。あの木。」

ここに来るのは本当に久しぶりだ。

「なんだか、寂しいですね。」

「ああ。彼……。いや、あの木はかなり前から一人だったよ。」

「ふふつ。彼の事はなんだか見た事がある気がします。」

「彼って……。それより、見た事あるの？」

「いえ、見た事ある気がするだけです……。」

こんなに遠くに一人で来るなんて……。

いや、一人なのかはわからないが彼女も物好きだ。

「でも、なんだか彼にいろいろ話をした気がする。」

健人さんにひかりの事を告白されたのは、一週間前の事だ。

当然驚きはした。

しかし、なんだかあの病室での事に妙に納得する事ができた。

でも、記憶がなくなったという事は……。

今までの記憶も、思い出も全部……。

「ひかり。ここで昼食食べようか。」

「はい。」

これから先、この風景がずっと続いていくのだろうか？

彼女は記憶を取り戻すことができるのだろうか？

僕は彼女にしてあげれる事は数少ない。

でも、少しでも彼女にしてあげれる事はなんでもしてあげたい。

少しずつ変わり続ける事を拒んでしまったらどうなるのだろうか？

いつの日か、願い続けるあの風景に辿りつけるだろうか・・・。

どのくらい歩いただろう？

あの光に近づく事ができているのだろうか？

手を伸ばせば届きそうでも手を伸ばせば少しずつ遠ざかるような気さえる。

ここは何処だろう？

僕はどうしてこんなにも広く美しい世界で一人きりなのだろう？

どうしてだろう？

さっきまで冷たいと感じていたはずのこの世界が暖かく感じるのは・
・・。

僕は少し怖くなった。

あの光は本当に孤独から救いだしてくれよう光なのだろうか？

触れた瞬間地獄へ突き落とされるような気さえする。

怖い。

恐怖が突然大きくなった。

でも、僕は決めたんだ。

あの光を目指す事を。

誰かに触れたい。

誰かと話したい。

誰かを好きになりたい。

大切な何かを見つけたい。

そうだ。

恐れる事は何も無い。

ここで僕ができる事はあの光を目指す事だけ。

どれだけの時間がかかろうとも。

少しづつ進めばいい。

僕は覚束無い足で少しづつ進んだ。

感情

カサツつとカーテンが風に吹かれ擦れる。

随分と読み耽っていたようだ。

いつからだろうか？

日記を書かなくなったのは。

今も昔も何も変わっていないはずなのに、何処かに何かを落っこ
してしまったような・・・。

ふと時計を見る。

既に日記を読みだしてから5時間もの時間が過ぎている。

日記を見つけたのはたしかお昼頃だったはずだ。

当時の彼の書いた文字は何処か活き活きとしている。

本当に毎日一日も欠かさず書き綴っている。

私の少しの変化が喜びだったのだろうか。

私達の終着点は何処だったのだろうか？

白紙の切符を渡されていたはずなのに、既に運命は決められてしまっていたのだろうか？

勿論、神様でもなんでもない私がそんな事わかるはずがない。

君が君だけが好きでいたはずだったのに・・・。

「ひかり。」

「はい。」

「その……。なにか思い……。出せた……。？」

「いえ……。これといって……。？」

「そっか。」

明日、僕は実家に帰る事になった。

理由は単純。

ひかりを僕の両親に合わせる為だ。

石垣島にはたくさん思い出が残っている。

嫌な事も楽しかった事も全部染み付いたあの島に。

旅行も彼女が気分転換も兼ねてのつもりだ。

でも、正直僕は自分自身の事しか考えていないのかもしれない。

彼女が記憶を取り戻したとして、僕と彼女はこれからも変わり続ける。

この感情も彼女が持っていたはずの気持ちも全部。

「明日の旅行楽しみですね。」

ひかりが暗くなった空気を変える為かそんな事を言い出した。

「楽しみって、僕の里帰りに付き合ってもらっただけだよ？」

「それでも。私だって過ごしたんですよね？あの島で。」

「うん。」

「なら、とっても楽しみです。」

嬉しそうに笑う彼女は今も昔も少しも変わっていない。

そういえば、父も母も元気にいるのだろうか？

連絡をいつの間にか取らなくなったのはいつからだろう。

でも、あの人達の事だきつと元気でやっているはず。

いつの間にか眠ってしまった。

冷たさに気がつき、寝ていたという事に気づく。

少しは近づけたのだろうか？

あの光までの距離はわからない。

でも、少しは近づけたはずだ。

今日も、この世界に今日という概念が存在するならば。

歩こう。

あの光を目指して。

でも、いつもと様子が違うのは何故だろうか？

そうか。

黒い空から、白い何か降り注いでいるからか。

黒くて、本当に空なのかさえわからないあの空から白くて冷たい物が降るなんてなんだか不思議な感じだ。

遠くを眺めて見た。

光とは反対側の何もない草原だ。

でも、遠くに何か動いている物が見える。

それもひとつやふたつじゃない。

たくさん見える。

僕以外にもこの世界にいたんだ。

でも、彼等の動きはなんだかきこえない。

僕は、その存在が恐ろしく感じた。

何故だかわからないが、とにかく恐ろしかったのだ。

慌ててあの光へ走りですが、どんどん遠ざかっていく光。

それを見てさらに慌てる僕。

とにかく走らなければ。

故郷

本当の故郷なのかどうかはわからない。

父も母も住みついたこの島。

親戚なんて勿論いない。

でも、何処かで気に入ってしまったんだろう。

何年ぶりだろうか？

この島へ帰ってきたのは。

随分と昔のように感じる。

この島を離れた時はまだまだ子供だった気がする。

「へえ。ここが石垣島かあ。」

「そう。見覚えある・・・わけないよね。」

「うーん。でも、懐かしい感じがする。」

記憶はなくなっても、心や身体が覚えているのか・・・。

そんな事があるのかどうかはわからないがそう思ったかった。

「そろそろ来るはずなんだけどな。」

空港に着いた僕達は迎えに来るはずの母を待っていた。

結局一時間も空港で待っていた僕達は迎えに来ない母を待つ事に疲れ、バスで僕の実家へ向かう事になった。

「ごめんね。電話にもでないし、仕事が立込んでいるのかも・・・」

「ううん。大丈夫。待つのは疲れたけど、バスで移動ってなんか旅行してるって感じだし。」

笑う彼女の顔には少し不安を感じ取れた。

「そうか。少し遠回りして帰ろうか。」

「うん。何処行くの?」

「行ってからのお楽しみ?」

「なんで疑問系?」

やっぱり笑う彼女は何処か無理をしているのだろうか。

バスは人は全然乗っておらず、僕達と老人と運転手くらいしかいなかった。

目的の場所は、たぶん地元の人しか知らない隠された場所のような海だ。

「綺麗ですね……。」

彼女の表情からは何も読み取れなかった。

どんな事を考えているんだろうか。

この場所はあまり人が来ない。

昔彼女を連れて来たことがあるこの場所は、昔より汚れてしまっている。

感動も何もかも全部変わってしまった。

ここまでの道の途中も変わっていた。

新しい公園ができ、新しい家が出来上がり、山が切り崩されている。

この小さな島にとっては良い事なのかもしれない。

「ひかり。そろそろ行くところか。」

「そうですね。もう夕方ですし、お腹空きました。」

「ただいま。」

「高志！あんた今まで何処行つてたのよ！」

「いや、母さんが迎えに来なかったから少し散歩をしてきたんだよ。」

「あんただけならいいけど、ひかりちゃんまで一緒に連れまわして。」

「いえ、私は楽しかったので大丈夫ですよ。」

「本当にあんたって子は……。」

久しぶり再会した母は少しも変わらなかった。

変わったと言えば、少し年をとったところか。

「今日、お父さんは少し遅くなるらしいから。」

「そっか。仕事忙しいみたいだね。」

「まあね。それよりひかりちゃん本当に久しぶりね。」

母とひかりは昔のように話込んでいた。

こんなところは昔と変わらない。

僕は少し安心した。

同時に僕は、彼女の為に記憶を取り戻したいのか僕の為に取り戻したいのかよくわからなくなった。

やっぱり僕は自分の為に行動しているのだろうか……。

遠い。

走り続けてどれだけの時間が経ったのだろうか？

呼吸がしづらい。

今になって気がついた。

僕は呼吸をしていたんだ。

こんな事に今更気がついた。

ここはなんだろう。

静かなこの世界。

走り疲れた僕は立ち止まってしまった。

その場に蹲る。

漸く呼吸が落ち着いた僕は、辺りを見渡す。

辺りには誰もいない。

さっきまでいた彼等は何処へ行ったのだろうか。

わからない。

光は、まだ……遠い。

昔の風景

もう11月だというのにこの島は暖かい。

少し暑い気さえする。

少しも変わらないな。

「高志。」

「うん？どうしたの？」

「ひかりちゃんもいるし、いつか行ったパスタ屋に行こうか？」

「パスタ屋って……。あのタコライスの美味しいところ？」

「そうだ。」

父の提案に反対する理由などなく、僕は静かに頷いた。

子供の頃行ったレストランは、場所は変わっていなかったが昔より少し大きくなっていった。

「いらっしやいませ。あら？牧野さん。」

「今日も来ました。」

母はどつやらここの常連客みたいだ。

母も父も変わらないと思っていたが、このT e aは外装も変わり中も昔とは違った大人向けのレストランに変わっていた。

昔は家族で和気藹々（わきあいあい）とした雰囲気があったのに。

「うちの息子がここのタコライスが食べたいって言うから連れてきたのよ。」

「息子さんって中学生位の時に何回か来てましたよね？」

「本当によく覚えているわね。」

女性の世間話は長い。

店に入ってから15分程過ぎているというのに席に案内すらされないのはどうかと思っ。

まあ、この島ならではの風景なのかもしれない。

来店して、30分程の時間が経ち漸く食事できる状態になった。

「じゃ、今日のおすすめ4つで。」

「ちょっと親父！ひかりにもちゃんと聞いてから決めろよ！」

「ううん。私もそうしようとしたから大丈夫ですよ。」

昔もこんな事があったな。

父はその時の事を覚えていたのだろうか・・・？

ひかりはやっぱり嬉しそうな顔をしていた。

その顔を見るお僕はやはり何も言えなくなった。

今日は、父も母も仕事は休みと言っていたから食事の後はドライブにでも行くのだろうか？

「じゃ、次はドライブでもするか！」

やっぱり父は昔の事を覚えていたのだろうか。

「あら、いつもなら帰って寝るって言うのに。」

母の笑顔も何処か懐かしむ様な気さえしてくる。

横目で見たひかりは何も変わらず、夫婦のやり取りを楽しんでいる様子しかなかった。

「今日は楽しかったです。ありがとうございます。」

夜、父と酒を酌み交わしている時の事だった。

「昔の事は思い出すことは出来ませんでしたけど、ここで過ごしたんだってという実感が湧いたような気がします。」

「そうか。それは良かったよ。」

父の優しい笑みを久しぶりに見た。

「はい。あ、私も一緒に飲んでいいですか？」

「いいよ。一緒に飲もうか。」

母がいて、父がいて、ひかりがいて、そして僕がいて。

こんな風景を望んでいたんだと改めて感じた。

僕自身、時間があまりない事を知っているから。

空を見上げてどのくらいの時間が経ったのだろうか。

そろそろ歩かなければ。

でも、足が動かない。

それどころか、胸が痛い。

呼吸が乱れるほど鋭い痛みが僕を襲っていた。

この痛みはなんだろう？

僕は何故こんなにも苦しんでいるんだろう。

わからない。

ずっと同じ毎日を過ごしていたのに。

今にして思えば、この痛みはもっと前からあった気がする。

あの光の存在に気が付いた時からだろうか？

それとも、この世界に存在してしまった時からだろうか・・・。

それでも、僕はただこの痛みに耐えて蹲る事しか出来なかった。

記憶

「もっとゆっくりしていけばいいのに。」

「アルバイトとはいえ、長い間休むわけにはいかないだろ。」

「そうねえ……。」

石垣島に帰ってきてから、4日もの時間があっという間に過ぎ去った。

「ひかりちゃんも元気だね。なにか困った事があつたらいつでも言つてちょうだい。」

「はい。ありがとうございます。お世話になりました。」

母とひかりは、この4日間でも仲良くなっていた。

この4日間、ひかりは僕と一緒にの時間より母と一緒にの時間の方が長かった気がする。

「高志。」

「ん？」

「お前がどう思っているかは知らないが、後悔するような事やひか

りちゃんを悲しませるような事をするなよ。もし、悲しませるようなら……。」

「父さん。わかってるよ。」

「そうか。」

「うん。でも、僕もあまり時間が無いからね。正直焦ってるよ。」

父は何も言い返せず、ただ無心にそう願うように俯いているだけだった。

「じゃ、そろそろ時間だから行くよ。」

「気をつけてね。ひかりちゃんも元気だね。」

この4日間でひかりはある程度の記憶が戻った。

具体的に、なにが原因でなにがそのきっかけになったかはわからなかった。

僕自身の事も思い出してくれた。

ただ、事故の記憶はそこだけが抜け落ちたかの様にしっかりと無かった。

もちろん、記憶を失っていた時の記憶はしっかりと残っている。

僕は恥ずかしい様な誇らしい様な妙な気で居心地が悪かった。

でも、あの二人に自信を持って報告のできる事は良かったと思う。

「おかえりなさい。」

長いようで短い里帰りも終わり、東京に帰ってこれたのは飛行機に乗ってから3時間以上も後の事だった。

「石垣は楽しかった？」

「うん。楽しかったよ。」

まだ二人には、言っていない。

この二人の驚いた顔を見れたのは、なんだか愉快だった。

「へ？ひかりもしかして……。」

涙を浮かべる朋美さん。

それから、無言で抱き合った。

「高志君、ありがとう。」

健人さんのその一言はとても感動的で、僕がやってきた事は意味のあるものだったと感じさせてくれた。

僕だけの独り善がり（ひとりよがり）のようなものを何処かで思っていた。

なぜだか、そう感じていた。

「いえ、あの……。ありがとうございます。」

「君は可笑しな事を言うな。」

小さく笑いながら僕の肩を叩く彼はとても嬉しそうだった。

それから、僕は久しぶりのヒバリへ向かった。

お土産と言える様な立派なものは何も無かったけど、何故だか彼らに会いたくなつたからだ。

カラン。

扉を開けるとそこには、祐一さん、徹君、風子さんの三人が揃っていた。

「あ、いらっしやいませ。」

慌てた様に僕の元へ小走りやって来る彼女は僕の事に気が付いていない。

それより、顔がもの凄く赤かった。

「御一人様ですか？」

「一応、そうなりますね。」

小さく笑いながら答える。

「え？いやだ。高志君……。今の私を見ないで！」

言っている事がよくわからなかったが、祐一さんと徹君のテーブルへ黙って向かった。

「お久しぶりです。祐一さん。あと、徹君。」

「本当に久しぶりだな。」

「高志さん酷い。俺はおまけ扱いなんですね」

何処か嬉しそうにしている祐一さんとは逆に、徹君は余裕のない雰囲気だった。

それに、彼もまた顔がうつすらと赤かった。

その表情を見て漸く納得できた。

「で、徹君。結果は？」

率直に彼に聞いてみる。

隣で小さく意地の悪そうに笑う祐一さんを彼は睨み付けていた。

「高志さん。理解するの早すぎです……。それに、祐一さん笑い過ぎです！」

「だってお前あれは無いだろ。」

急に真剣な表情になったかと思うとすぐにその表情は崩れまたさっきまでの意地の悪そうな笑顔になった。

「一体どんな風に告白したんだい？」

「こいつ、風子さん。これからは風ちゃんって呼ばせてください！
って。」

「へ？それだけですか？」

「そう。それだけ。だから、鈍感なあいつはちよつと恥ずかしいけどそう呼びたかったらいいよ。だって！」

「要するに告白とは思わなかったわけですか。」

「だから、俺がアシストしたって言うより変わりに教えてやった。申し訳なさそうに、だけど面白そうに笑う彼を徹君は更にきつく睨み付けていた。」

「結果は、保留って事になりましたよ。」

少し拗ねたように言う彼からは、少し満足そうな表情が読み取れた。「それで、勘違いした風子さんは恥ずかしさと戸惑いであるの状態になっただんですね。」

「そういう事。」

「でも、意外ですね。」

「何がだ？」

「だって僕はてっきり祐一さんも風子さんの事が好きなんだと思ってましたよ？」

「は？お前達ってもしかして俺と風子の関係知らない？」

「はい。」

僕の代わりに徹君が答える。

「俺も気になっていたんですよ。二人の関係。」

「はあ。あいつがちゃんと言わないからこんな面倒くさい事に……」

「早く言ってください!」

「俺と風子は、単純に従兄妹だ。」

「え?でも、苗字が違うしでもでもなんかとても仲が良いし……」

徹君は恋敵とでも感じていたのだろう。

「それに、俺と風子の歳の差考えてみるよ。9歳も違うんだぞ?」

「愛に時間は関係ない!って誰かが言ってた気がしますよ?」

「はあ。まあ、いいや。俺と風子が仲良いのはあいつの両親と関係がある。」

「いや、祐一さん。もういいです。それ以上は言わないでください。」

「へ?高志さん?」

なんだか、嫌な予感がした。

たぶん、彼女から家族の話聞いた事がない事が関係しているのだから。

「いいです。悲しい事はあんまり聞きたくないです。」

「そうか。わかった。あいつが自分から言うまで待っている。な？」

徹君の頭を乱暴に撫でまわす彼は、何処か安心しているような気がした。

「もう、ちょっとやめてください！わかったから、彼女が言ってくる日まで待ちます。」

久しぶりの空気。

何処か安心できて、楽しいこの雰囲気。

いつからだろうこんな感動を失くしてしまったのは。

あの日、まだ子供だった。

彼女を最初に失ったあの日からだろう。

漸く戻ってきた時間。

でも、それもあと少ししか続かない。

この空気が時間が一日がとても愛おしく想うと同時に憎たらしくも感じた。

消毒液の匂い

街も風も空気も変わり続ける。

人も心も。

あれから、数ヶ月の時間が流れた。

白で彩っていた景色もいつの間にか桃色に染まった。

僕も、あれから随分と変わり果てた。

消毒液の匂いに染められてしまった。

石垣島へ行く前僕は、一度転んだ。

神様の悪戯なのかわからない。

ある日、ヒバリで使う食材をいつものように買ったため商店街に向かっている時の事だった。

何処にでもあるような歩道。

段差など無かった。

僕は転んだ。

普通に転んだだけだった。

そこから、立ち上がるうと必死になった。

ただ、恥ずかしさからくる焦りが強くて立ち上がる事が出来ないとその時は思った。

でも、どれだけ必死に立ち上がるうとしても立ち上がる事が出来なかった。

周りの人達がなかなか立ち上がりず寝転んでいる僕を見て不審に思ったのか、声をかけてきたが焦りからなのか僕は声を出す事が出来なかった。

事の重大さに気がついた数人の人が救急車を呼んでくれた。

病院に運ばれ、病気が進行している事を知らされた。

病名は筋萎縮性側索硬化症。

この病気はすぐにはわからない。

診断結果も出す事は難しいらしい。

昔、父の知り合いの人が僕と同じように転んで、その後この病気を診断された事を父に聞いた事があった。

僕は病院に運ばれ検査を受けている時この事を何故か強く思い出していた。

次の日、僕は専門の病院へ行った。

僕の予想通りこの病気だった。

不幸中の幸いなのか、この時はまだしっかりと歩けた。

たまにふらついてしまう事はあったが。

石垣島に帰る事がすでに決まっていたこの時にこの病気がことが発覚した事は、僕にとって人生で何もかもすべて変わってしまった瞬間でもあった。

ひかりにも、風子さん、徹君、祐一さん、健人さん、朋美さん、父母。

僕の数少ない大切な人達。

この中の数名に僕は病気の事を打ち明けた。

父と母は、泣きそうになりながらも頑張れと言ってくれた。

朋美さんと健人さんは何も言えずただ涙を流してくれた。

石垣島から帰ってきて数日後の事。

「風子さん。」

「どうしたの？高志君。」

いつものように首を傾げて、微笑んでいる。

「あの、急なお願いなんですけど聞いてもらっても大丈夫ですか？」

「うーん。そう言われるとなんか怖いなあ。」

そう言いつつも微笑んでいる風子さんに僕は胸の奥が痛かった。

「今日でじばりを辞めさせてください。」

一瞬、何を言われたのか分からない顔をしていた風子さん。

意味を理解し始めると少しづつ泣きそうになっていった。

「どうして？ なにか気に食わなかった？ それとも私達が嫌いに・・・
なったの・・・？」

最後のほうはもうほとんど涙声に変わっていた。

「すみません。」

「すみませんじゃわからないよ！」

「ここも風子さん達もみんな大好きですよ。でも、どうしてもここを辞めないといけないんです。」

「意味分らないよ。言ってる事と行動が全然違うじゃない。」

「すみません・・・！」

この時僕は人生初めての土下座をした。

やっぱり風子さんは必死になって止めようとした。

「僕の我が儘なんです。ここで生きた事を心に刻み込むにはこれ以上は辛いんです。お願いします。」

「わかった……。」

数分の沈黙のあと、とても小さな声で風子さんは答えた。

「もう、帰っていいよ。」

「はい。いままでありがとうございます。」

風子さんの声は感情があまり感じられなかった。

カラン。

「ありがとうございました……。」

店先で呟いた言葉は誰にも届かなかっただろう。

それから数日後、僕はとうとうほとんど歩けなくなった。

これまで、気力とかそんなもので歩いていたのだろう。

医師も今まで普通に歩いていた事を不思議がっていた。

それからすぐに入院する事になった。

誰にも気づかれる事なく静かに病室のベッドで横になった。

日記

消毒液の匂いは僕の体を時が進むにつれて体に馴染んでいった。

それがなんだか面白くて微かに笑った。

最近は、体の調子が良い。

それが良いことなのかはわからなかった。

一人きりの病室は僕には広すぎてなんだか悲しくなってしまう。

せめてもの慰めに、日記を書く事にした。

日記といっても昔の事を思い出しては書く事の繰り返しだ。

これは日記と言えるのだろうか。

でも、人間はとても大切だと思っていた記憶でさえ時間の流れにより忘れてしまう。

こんな事でもない限り思い出す機会もそんなに多くないだろう。

そういえば、あの子は元気だろうか？

初めて会ったのは、たしかヒバリで働き始めた時だった。

徹君。

彼は、僕の遠縁の子にあたる子で初めて会った時に気がついた。

理由は彼の父親のおかげで僕の両親は今まで働いていたからだ。

彼から話を聞いているうちになんとなくわかった。

後日、父に連絡して確認をしてみるとやはりその通りだった。

それから、僕は彼の事がなんだか自分の弟のようで可愛かった。

女性が苦手だと言っていた事も、恋をして悩んでいた時もなんだか昔の僕に似ているようでやっぱり遠縁の子とはいえ、血が繋がっているんだなあと感じたりもした。

彼はたぶん僕の事は知らないのだろう。

昨日の事だった。

僕が最も嫌う父に呼び出されたのは。

父の言葉、淡々と語った。

よくわからなかった。

実は、僕と高志さんは遠い親戚だったらしい事。

彼がヒバリをやめてからの数ヶ月、現在進行形で入院している事。

父が僕と高志さん関係を知っていた訳ではなかった。

ただ単純に遠い親戚とはいえ、同じ仕事をしてきた仲間の息子のお見舞いに行くことは可笑しい話ではないというだけだった。

父は、仕事の関係上という理由で僕に面倒事を押し付けたのだ。

だけど、この時ばかりは父に感謝した。

みんなを悲しめた彼を叱らなければ。

果てしなく続く黒い空。

限りなく続く白い草原。

僕はどれだけの時間この場所にいるのだろう。

恐怖の対象の彼らは消えてしまった。

同時に僕はまた孤独になった。

そういえば、さっきよりあの光の輝きが強くなっている。

いつの間にかあの輝きに近づく事ができた事に僕は驚いた。

今までの努力は無駄ではなかったと安心することができた。

ふと思った。

呼吸をしているのに、僕には体がない。

なぜだろう。

走っていたという事は僕の思い込みだったのだろうか。

今はもうわからない。

少し記憶がぼやけてきた。

視界も暗くなってきた。

僕はまた眠るのだろうか。

そんな事を考えているうちに、いつの間にか眠ってしまった。

視界が完全に暗くなってしまふ瞬間、空が黒い空が青く見えたのは
たぶん僕の気のせいなのだろう。

流れる時間の中で

彼は元気なのだろうか？

あの手紙が届いてから、もう数ヶ月の時が過ぎた。

なんとなく納得した。

口下手で臆病な彼は、私に直接伝えられるだけの勇気が持てなかったのだろうと思った。

藤原 ひかり様

お元気ですか？

石垣島から帰ってきてから、どれだけの月日が流れたのだろう。

本題なのですが、僕は来週外国へ行くことになりました。

何故かというと、漸く就職することができたからです。

でも、就職したもののすぐに出張する事になりました。

なんでも、新入社員は必ず参加しなければならないらしいです。

いきなりの話で僕も大変驚いていますが、これがきっかけでなにか新しい物を見つける事が出来るかも。

そんな期待を背負って出張に参加したいと思います。

いつ終わるものなのかはわかりませんが、少なくとも帰ってきた僕は少しは変わっていると
思います。

たぶん、ひかりは知っていると思うけど僕は口下手です。

そのうえ臆病です。

なのでこの事は手紙でお知らせします。

どうか、体に気をつけてください。

牧野 高志

彼からの手紙が届き、読み終わった後すぐに彼に電話をしてみたがすでに解約をしていたのか携帯のスピーカーからは無機質な音声が届いてくるだけだった。

この数ヶ月彼からの連絡がなかった事に疑問を感じた自分がいた事に今更ながら気がついた。

彼はいつか遠くへ行ってしまうような気がしていた。

そう思っていた事もあった。

もちろん本当にそんな事を思っていたわけではなかった。

父も母も、この手紙が届いた時に悲しそうな顔をしていた事は記憶に新しい。

父も母もきつとずっと前にこの話を聞いていたのだろう。

でも、この時の私はとても気持ちが悪かった。

彼は前へ進んだ。

次は私の番だ。

カラン。

「いらっしやいませ。御一人様ですか？」

「あの、表のバイトの広告を見たんですけど面接お願いできますか

「？」

「まずは、仕事を探す事から始めよう。」

「受かるといいな。喫茶店ヒバリ。」

うつすらと見える黒はなんだろう？

思い切って目をあけてみた。

ああ、そうか。

あれは空だった。

この孤独な世界の空だった。

頭の片隅にあるあの青い景色はなんだろう。

考えてみてもわからない。

そうだ。

あの光は何処だろう。

あの蒼くて幻想的な輝きを放つあの光。

それは、僕の隣にあった。

恐るおそる触れてみようか？

触ってしまうと壊れてしまいそうでなんだか怖い。

でも、触らなければ何もわからないだろう。

触れてみると、光は僕を包み込み辺りはその光に染められた。

眩しすぎて目を閉じようとした時、今までの記憶が駆け巡った。

それでも、光は眩しすぎて僕はそのまま目を閉じてしまった。

月を見上げる乙女の心

あれから、いくつもの春が過ぎ、夏が秋が冬が川の水のように過ぎ去っていった。

彼からの連絡はまだない。

連絡が来るのかさえわからない。

「ひかりちゃん。お客さんもいなくなつたし休憩しよつか。」

「はい。風子さん。」

カラン。

「お、いまから休憩？」

「そつだよ。徹。」

「サボリですか？徹さん。」

喫茶ヒバリで働いてから4年の月日が流れた。

ここでの仕事は楽しい。

風子さんの旦那さんの徹さんもとても優しい人で、ヒバリの事を大切にしている。

毎日がとても充実していて楽しい。

これも、あの日急なお願いを心良く引き受けてくれた彼女に感謝。

「違うよ。今日は会社の健康診断で病院に行ってたんだよ。」

「へ？健康診断って各自で病院に受けに行くものなの？」

「さすがに、それが言い訳にしては厳しいかも……。」

苦笑いする私。

「いや、だって俺次期社長だし。」

「はいはい。あなたにはまだ無理でしょ。」

この二人はとても仲が良い。

見ていて羨ましく思う。

彼が傍にいてくれていたらと、時々思う。

「そうだ。本当は今日、ひかりさんに話があって来たんだ。」

「私……ですか？」

「はい。風子、少しの間ひかりさん借りるよ。」

「うん。わかった。」

どつちやら真剣な話をするようで、私達二人は近くの公園へと向かった。

「あ、コーヒーで大丈夫ですか？」

「はい。」

徹さんから受け取ったコーヒーは、肌寒くなったこの季節にはとて

も嬉しく温かった。

「で、お話というのは？」

「はい。あ、その前にこれ渡しておきますね。」

徹さんは、鞆から一冊の本を取り出し渡してきた。

「これは？」

「それは、一人で落ち着いた時にでも読んでください。」

彼の真剣な表情に私は頷く事しか出来なかった。

「さて、高志さんの事は覚えてますか？」

彼がなぜあの人の事を話そうとしているのかわからない。

「徹さんは何か知っているんですか？」

「まあ、それをいまから話すんですけどね……。」

「そうですね。」

私が一呼吸入れ、頷いた事を確認すると彼は淡々と話し出した。

簡単に話をまとめると彼は、牧野高志はもう死んでしまったらしい。

その事だけが、頭の中から離れてくれなかった。

どうしようもなかった。

これから、自分に正直に生きていこうと誓ったばかりなのに。

あの人はもういない。

結局最後まで私たちはお互いの気持ちを確認する事すら出来なかった。

でも、どこかでそんな感じはしていた。

たぶん彼から手紙をもらった時からだろう。

だからだろうか？

不思議と悲しみや怒りといったものは込み上げてこなかった。

「そう。彼にもいろいろあったんだね。」

「すみませんでした。今まで隠して……。」

「ううん。いいの。私の方こそごめんね。辛かったですよ……?」

「いえ……。」

彼は話をしながら泣いていた。

徹さんはずっと我慢をしていた。

辛い事も全部。

だから、私はこんなにも落ち着いてられているのだろうか？

「今日は、もう帰って大丈夫ですよ。店は僕と風子で閉めますから。」

しばらくして、漸く落ち着いた彼はそう呟いた。

「うん。ありがとう。」

感謝の言葉はいろんな意味が込められていたような気がした。

自分で言ったのになんだか不思議だ。

気が付けば、何時の間にか自分の部屋へ帰ってきていた。

ふと、手に持っていた日記を持ち上げて見た。

それから窓枠に腰掛け、徹さんに渡された日記を読む。

いろんな事が書いてあった。

私の知らない彼。

私の知っている彼。

彼自身の事をたくさん知る事が出来た。

微笑ましい事もあれば少し嫉妬に似たような感情も込み上げてきたり、読んでいる事がとても楽しく感じた。

気が付けば、日記も最後のページになっていた。

日付は2年前。

この日記を書くのはたぶん今日で最後だろう。

もう手も動かなくなってきた。

口だけはなんとか動くけど、誰かに代筆をしてもらうのはなんだか恥ずかしいからこれで最後にしようと思う。

夢も希望も、何もかもを無くしてしまった時期にもう一度ひかりに会えた事で取り戻す事が出来た。

最初から、僕は弱かったんだ。

何かに縋らないと生きていけない人だった。

それは当たり前前の事なのかも知れない。

誰かの犠牲があつてこそ人は生きていく事が出来る。

そして幸せになれる。

そうなんだろう。

生きているうえで犠牲を払わずに生きていくにはどうしたらいいんだろう？

一人で生きる？

自分を犠牲にするような生き方をする？

こんな単純な考えしか僕には思い浮かばない。

僕は今まで誰かを犠牲にしすぎていたのだろうか？

それがこの罰なのだろうか？

怖い。

死ぬ事への恐怖は薄いがあの人と逢えなくなる事の恐怖は強すぎる。

誰でもいい、僕を助けてくれないか。

でも、これで弱虫な僕から卒業できるのは悪くない。

あの人と逢えなくなる事は怖いけど、何も悪い事ばかりじゃない。

考えがまとまらないな。

あなたに出会えた事にありがとう。

あなたを好きでいさせてくれてありがとう。

かな。

窓の外から、気持ちのいい風が吹いた。

私は、耳にかかる長くなった髪を耳にかけた。

空には綺麗な月が浮かんでいた。

光見た坂道で

あの日記は、途中で終わっていた。

途中から綺麗に破り取られていた。

その続きが気にならないと言えば嘘になる。

でも、読めなくて嬉しくも思う。

これから先、生きる事への励みになると感じたからだ。

左手には、買ったばかりの薄い紫色の蘭。

何年ぶりだろう？

この場所に来るのは。

彼がまだ生きていた時以来だろう。

「久しぶり。元気にしてた？」

こうして二人きりで話をするのは何年ぶりだろう。

「私ね、あなたの事好きだったの。」

もう伝えられる事はないと思っていた言葉を口にする。

「あなたはどうでしたか？」

聞かなくても分かる。

「そうだよね。聞かなくても大丈夫かな。」

心を繋ぎ止めるものはもう何もない。

「抱き寄せて、私の胸であなたの頭を撫でる事も横で笑う事も横で眠る事もあなたの名前を呼ぶ事さえ出来なくなるのは寂しいね。」

今まで泣く事がなかった私は初めて彼のお墓を前にして涙を流す事ができた。

「私ね、やっとあなたの為に泣く事ができたんだ。」

もうそれ以上言葉は続かなかった。

「それじゃ、さよならだね。」

漸く落ち着いた私はその言葉を最後にその場を去った。

「おめでとう。」

「ありがとう。お父さん、お母さんいままで本当にありがとう。」

あの日から3年の月日が流れた。

彼の事は覚えている。

良い思い出の一部だ。

結婚式場には高志君の両親の姿も見えた。

「ひかりちゃん、おめでとう。本当に綺麗だよ。」

「ありがとうございます。」

私の夫となる人はどんな気分なんだろう。

それでも、私はこの人と幸せになりたいと思えた。

彼のおかげでたくさんの思い出を手に入れる事が出来た。

ありがとう。

感謝の言葉しか出てこない。

私は幸せになります。

この人と一緒に。

高志君。

さよなら。

あの人は元気でやっているのだろうか？

一人きりで泣いていないといいが。

ああ。

きっと大丈夫だ。

僕が愛した人だもの。

幸せにしてあげるのが僕じゃないのは少し悔しいけど、幸せならそれでもいいか。

ウエディングドレス姿見たかったな、きっと綺麗なんだろうな。

もっとたくさん一緒にいたかったかな。

なんか、いろいろ伝えたい事があるのにもうぼやけてて分からなくなってきたよ。

この坂道を登ればあの光に触れる事が出来るんだ。

きっと次の人生が待っている。

来世までは、花婿君勝負はお預けみたい。

ああ。

ありがとう。

また、逢える事を楽しみにしているよ。

その時まで、さようなら。

大好きだったよ。

ひかり。

桜

前略

牧野 高志様

お久しぶりです。

お元気ですか？

手紙なんて久しぶりですから、何を書けばいいのかわからないな。

うん。

走っても、転んでも、泣いても、笑っても。

時間は進み続ける。

もし、あなたが生きていたなら私はどうしていたんだろうか。

きっと、お互い何もせずただただ時間の流れに身を任せていたの
でしょうね。

私達はいつまでも似たもの同士だったのかもね。

それにしても、追いかけていたものが実は偽者だったのだからあ
なたと私にしたら本当に迷惑な話だったね。

きつとこれからもあなたの事は忘れないと思う。

でも、それは親友としてかな・・・。

考えてみれば、私達って可笑しな関係だったね。

お互い、惹かれていたことは確かな事だと思っていた。

でも、きつと何処かで私達はずっと一緒にはいられない事を感じ取っていたよね。

私達の想いは恋ではなかったんだよね。

兄弟愛？ 家族愛？

よく分からないけど、そんな感じ。

確かにあなたの人生は本物でした。

あなたとのたくさんの思い出や別れは今では良い思い出です。

うん。

ありがとう。

高志君。

私は私自身で選んだこの道ゆっくり進んでいきます。

p . s .

あ、そうそう。

子供が生まれました。

少し小さい女の子です。

目元は私にそっくりかな？

名前はさくら。

これから、もっと幸せになりたいと思います。

それではお元気で。

藤原
ひかり

あとがき

更新が遅くてすみません。

文章が下手くそですみません。

漸く、雪月花と月光花の二部を完結させる事が出来ました。

文章的にも雰囲氣的にもなんか暗い感じの話になってしまいました。
自分の小さい頃の話と叔父の話を混ぜてしまった事がいけなかった
のかもしれないですね。

混ぜてしまったら、面白くなるかな？

と、単純に考えてしまいました。

反省してます。

登場人物の中に徹君っていたと思うんですが、あれは僕です。

叔父と言ってしまっていていいのかわからないんですけど、叔父でいい
のか？（笑

本当は入院している時の話をもっと詳しく書きたかったんですけど、
なんか思い出し泣きしちゃいましてやめました。（笑

最終話の手紙なんですが、僕は中身を見ていないので実際はどうだったか分かりません。

想像と勢いで書きました。(笑)

彼女が子供を産んでから、急をお願いしますって言われて叔父にお供えしたものですから。(笑)

あ、風子という登場人物は本当は僕と付き合っていたりはしてないです。(笑)

だって好きだったんです。

小説の中だけでも付き合ってたかっただんです。

はい、今では反省してます。

まあ、今は新しい恋に向かって爆走中です。(笑)

その風子さんは今では一児の母親です。

旦那さんがカッコいい人で……。

はい、完全に負けました。(笑)

途中から、愚痴になってしまいましたが、長い間僕に付き合ってく
ださった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5552o/>

月光花

2011年10月1日12時18分発行